さあ、私たちといっしょに、新しい生活の1ページをめくってみませんか。地域福祉事業所、深谷・だんらんグループ

食（とうふ）からケアまで“地域の必要”に対応しています。
私たちは、自ら出資して自分たちで福祉事業を
運営するワーカーズコープです。
市民のための介護保険事業も展開。

高齢者のための配食事業

愛彩弁当

〒366-0027
深谷市天神町4-35
TEL・FAX048-574-6898

高齢者の自立支援と生きがいづくり

深谷地域福祉事業所「だんらん」

●ご家庭にホームヘルパーを派遣（訪問介護事業）

●デイサービス（通所介護事業）

〒366-0027　深谷市天神町4-35
TEL048-574-9065
FAX048-574-9064

お子さんからお年寄りまで
安心・安全、
国産大豆を使ってお届け。

とうふ工房

〒366-0814
深谷市大谷1548-3
TEL・FAX048-574-4789

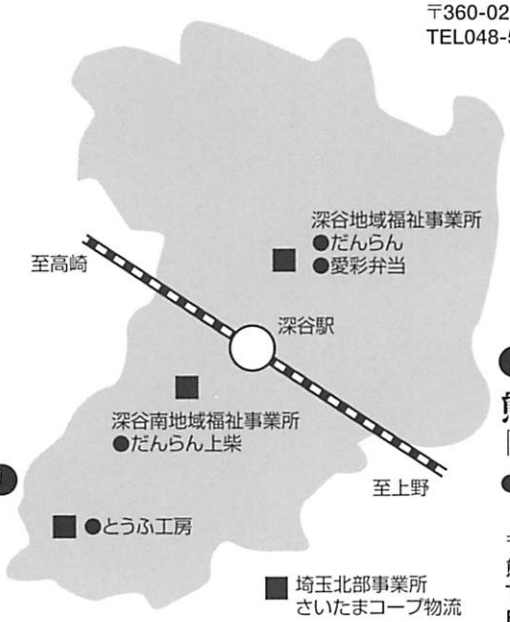
豊かな自然のなかで、ゆったりできます。

妻沼地域福祉事業所「デイサービス・ほほえみ」

●ご家庭にホームヘルパーを派遣（訪問介護事業）

●デイサービス（通所介護事業）

〒360-0203　大里郡大字弥藤吾50
TEL048-567-3820　FAX048-567-3821



高齢者の自立のために

熊谷地域福祉事業所「ほほえみ」

●ご家庭にホームヘルパーを派遣（訪問介護事業）

〒360-0015
熊谷市大字肥塚1361-1
TEL048-599-3251
FAX048-599-3252

パワーリハビリ・ナイトケア

深谷南地域福祉事業所「だんらん上柴」

●生粋（いきいき）くらぶ
（介護予防を中心に地域に根ざした交流の場）

●ご家庭にホームヘルパーを派遣（訪問介護事業）

●デイサービス
（パワーリハビリも入っています。通所介護事業）

●ナイトケア
（だんらん利用者の緊急のお泊まりに対応）

〒366-0052　深谷市上柴町西4-23-8
TEL048-551-7022　FAX048-551-7023

地域福祉事業所

深谷だんらんグループ

FUKAYA DANRAN

目次

3 今日よりも明日へ、希望を持てる地域社会をつくる拠点
——協同労働、地域福祉事業所とは
永戸祐三専務理事に聞く

7 協同の仕事おこし・多機能化への挑戦
——年表で見るだんらんグループ

8 イラストルポ・だんらんのデイサービス
■栗原大輔

こころもからだもすこやかに
10 生粋（いきいき）くらぶ ●深谷南地域福祉事業所
■中田かほる

真剣に愛情を持って、アットホームで開放感いっぱい
14 デイサービス・ほほえみ●妻沼地域福祉事業所
■山川弘子

安全・安心にこだわって
18 だんらんの旅立ち●とうふ工房
■中田かほる

いいものを、おいしいものを
21 高齢者配食サービス●愛彩
■中田かほる

高齢者の自立を願って
24 100人を超えるだんらんヘルパー
介護福祉士の資格も取得して、大里秋子さん
■飯島信吾
だんらんで働くこと、私もひとこと

28 新しい“公共”をひらく深谷・だんらん
■菅野正純

33 やるしかないでしょう。
みんなで決めてみんなですすむ
人間として・女性として、岡元かつ子さん
■松沢常夫

44 だんらんのヘルパー養成講座の歩み

●ワーカーズコープ・センター事業団とは

ワーカーズコープとは、働く人自身が資金と知恵を出し合い、社会的に必要な仕事をおこし、ともに運営し、人と地域に役立つ仕事をおこす事業体・協同組合です。
ワーカーズコープ・センター事業団は、協同労働を通じて人と地域に役立つ仕事おこしと、協同・共生のまちづくり=新しい福祉社会の創造を目指す協同組合です。「協同労働の協同組合法」の実現をめざしています。
ワーカーズコープ・センター事業団は、1987年に誕生し、現在は全国に10の事業本部・開発本部、221の事業所・出張所（地域福祉事業所は109事業所）があります。事業に必要なNPO法人、企業組合法人等の資格も取得しています（2005年1月現在）

今日よりも明日へ、希望を持てる地域社会をつくる拠点

協同労働、地域福祉事業所とは——永戸祐三専務理事に聞く

文●松沢常夫

心を込めて仕事をしようとしたなら、協同労働こそ

——深谷「だんらん」グループの事業は、ワーカーズコープ（労働者協同組合）の事業、ということですが、これはどういうものですか。

永戸　「労働者」というと、日本では〝雇われている人〟とされていますが、そうではなく、「自立的に仕事をする労働者」「お互いに支え合って働く労働者」というありかたがあるはず。私たちは、そう思って20数年やってきました。

そういう働き方を保障する事業・運動組織が労働者協同組合で、そこでの労働を「協同労働」と呼んできましたが、最近、ひしひしとこの重さを感じています。

福祉施設も保育園も図書館も、公共が行っていた業務がどんどん民営化されている今、市民が自分たちでその仕事を担おう、地域をよくしていこう、と思ったら、雇用労働では社会的に意味あるものが消し込まれてしまうのではないか。自主的・自発的に、そして協同して、心を込めて仕事をしようとしたなら、協同労働で市民と地域が結ばれるしかない。そんな気がしています。

——ケアの世界でいうと、雇用労働との違いは？

永戸　特養ホームなどの施設に入ったお年寄りの多くは確実に痴呆状態になるといわれています。それは、一つには、お年寄りに本当の生活がないからだし、地域を実感できないからだと思います。日々、何かを買うことも、食事をつくることも何もない、何もさせてもらえない。そもそも「人生の継続性」が断ち切られてしまったことに大きな原因があります。

もう一つは、ケアをする人たちの状態です。多くが、命令と服従の関係の

中にあり、本当のケアをする仕組みの中にいない、といえるのではないでしょうか。施設長が何でも決め、施設長が言ったことをやるかやらないか、だけの世界になっているようなところでは、ケアワーカーが自分たちで実践し、フィードバックされたものを集団で検討し、より良くしていく、というような本来のあり方は乏しい。自分のいらだちを解消する場もありません。訪問介護でも、営利企業に雇われ、命令されて働く世界では同じことがいえます。

やはり、人間と人間の関係の仕事では、働く人同士も、利用者も、地域の人たちも、〝お互いが支え合う労働〟、つまり協同労働がふさわしいと思います。

永戸祐三・センター事業団専務理事

高齢者介護だけ良くなることはありえない

――「ヘルパーステーション」ではなく、「地域福祉事業所」と銘打っていますが。

永戸　「地域福祉事業所」としたのは、介護保険制度が始まる2年前、1998年です。そのときは、「地域保健福祉事業所」と呼び、「介護・福祉全般のサービスを専門的かつ総合的に提供する、市民自身が立ち上げ、担う事業主体」「高齢者、障害者の自立を支援するネットワークの中核」と位置づけました。

地域にある問題を福祉の観点で見ると、子どもが自分の将来に夢を持てず、働きたいのに仕事ができない人があふれ、お母さんたちは子育てに悩み、学校は荒れている。地域が分断されている結果、そういう問題がたくさん起こっています。

そういう事態の中で介護保険制度ができても、高齢者の介護のところだけの福祉力が突出して良くなるなんてことはありえません。保険制度は最低限の保障に過ぎないし、人の生活の本質的なところを支えるものは、制度のなかではなく、制度も活用しながら地域という大きな土台の上に生きる、人と人の関係のなかにこそあるわけです。

人と人とが支え合い、大切に思い、人間としてより良く生きられる人間の関係を作っていこうという市民の意志があふれ、そうしたものを保障する地域に変わっていく流れがなければ、介護の専門職としての力もなかなか生きてきません。

そう考えると、「地域全体の福祉力を高めていくネットワークづくりの拠点」「市民が複合的な事業能力を高めていく拠点」「介護の仕事をしながら地域全体を考えられる人間に育ちあう場」が中学校区に1カ所くらいは必要だ。そういう思いで、地域福祉事業所づくりを進めてきました。

主体的に地域に関わり納得のいく仕事をしたい

――そういうことを考え始めたのは、何かきっかけがあったのですか。

永戸　人間の普遍的な生活の原点は地

九州事業本部の青年たちを激励する永戸さん

域ですね。企業は伸びれば伸びるほど、外部化してしまう。地域を変えることを抜きに社会の変革などありえない―。そんなことを意識しはじめたのは、雑誌『世界』1994年4月号で、都留重人さんの「『成長』ではなく『労働の人間化』を!」という論文に接したときです。

都留先生は、「福祉とは生きがいである」というアマルティア・セン（ノーベル経済学賞受賞者）の説を紹介し、「生きがい」の具体的内容の第一に「労働の人間化」をあげておられました。

これに学んで、私たちは、「労働の人間化と地域の人間的再生を通じて、新しい福祉社会の創造を」というスローガンをかかげ、「今日よりも明日、明日よりも明後日に向かって自分自身が希望を持てる地域社会をつくろう」と言ってきました。

戦後の組織は、ほとんどが、企業が優勢になるときにつくられました。この過程で、地域社会にいる人―「市民」は受動性の中におかれてきました。地域や生活に必要なことは役所や企業任せで、自分は消費者。地域や生活に関わることは、自治体や国が公共としてやることだ、私たちは企業で働いて、そこで得たもので意味のある生活をするんだ、となっていました。

しかし今、自分たちの地域の重要なことは、あろうことなら自分たち自身の力でやりたいという人たちがどんどん増えています。自分が主体的に地域に関わって、なにがしか納得のいく仕事がしたい、人の役に立つことをやりたい、〝ありがとうね〟といわれるような仕事をしている実感がほしい。「協同労働」といい、「労働の人間化」といい、そういう地域の関係性のなかの労働、ということができるでしょう。

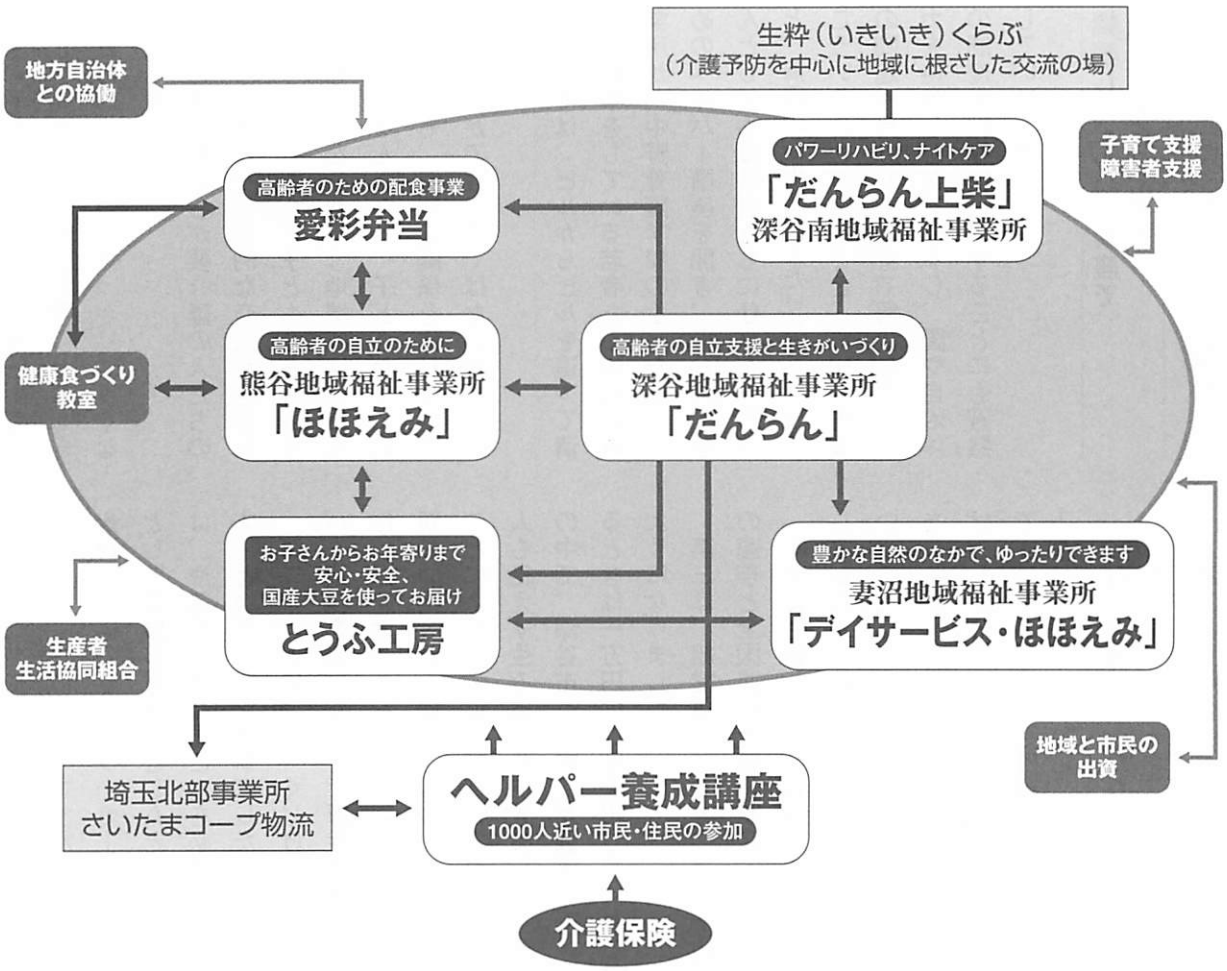
「市民性への自覚」によって新しいネットワークが

――「地域福祉事業所はネットワークの拠点」という話がありましたが。

永戸　人間は、一人では生きられないから、さまざまな組織に組織化されて生きています。その一つひとつの組織は固有の目的を持っており、目的が鮮明であればあるほど活力を生んできたのですが、社会全体が根本から大きく変わろうとするとき、固有の目的だけでは固有の目的も達成されない、とい

ヘルパー養成講座がうみだした“力”

だんらんの相互有機的なネットワーク



う段階がきます。

自分たちだけではことを解決できないとすれば、それを超えるものを創造する以外にない。そこにこそ「ネットワーキング」というキーワードがでてくるはずです。そのときは、組織を構成している一人ひとりの人間の「市民性への自覚」によって新しいネットワークが生まれ、それが普遍的なテーマを代表する組織に発展していく過程をとるのではないかと考えています。

私たちも、労協組織の中で、よい仕事をし、優れた労協組合員になると同時に、あらためて地域における自分の「市民性」を自覚した取り組みをしようと、「社会連帯委員会」という組織を結成しました。

日常普段に、生活の実態が組織のなかに入ってくるような、運動テーマを自覚させるような媒体が考えられなければ、と思います。

――２００カ所を越える地域福祉事業所ができているそうですが、高齢者介護以外の分野でもできているのですか。

永戸　東京の足立区に「わくわくクラブ」というワーカーズコープの学童保育所があります。〝商い体験塾〟を開

いて、子どもたちが地域の商店街のおやじさんたちから商いを習ったのをきっかけに、お互いがすっかり仲良くなりました。

この子どもたちが要介護の人たちのところを訪ね、日常的な交流が生まれるようになったら、子どもたちもお年寄りもどうなるか。〝地域にはいろんな人がいるんだ〟と、子どもなりに知るだけでも、協同の関係を作り上げていく基礎ができるのではないかと思います。

東京では、ビルからビルを追って清掃の仕事をしている若者たち中心の事業所が、中野養護学校の生徒たちのためのヘルパー講座を開き、さらに、なんとしても障害者たちに仕事を作ろうと、清掃の仕事を教えたりしています。こういうことが広がると、市民が失業の問題も自分たち自身で解決していく力を持つことができるし、国や自治体の制度を縦横に活用することにも習熟していけるでしょう。

継続したヘルパー講座で絶えず新しい出会い

――さいごに、深谷の「だんらん」グループについて、ここまできた要因など、どのようにみていますか。

永戸　本当の意味でワーカーズコープとして発展しきろうとしたとき、第一は、やろうと決めたことを必ずやり通す、ということを大事にしたこと。

第二は、とにかく、くじけずにヘルパー講座を続けたこと。厚生労働省が作った制度ですが、これを活用して、新しい出会いを繰り返しつくりだしたことにより、労協を選択してがんばる人も絶えず生み出されてきました。その中で、深谷市も、市民が講座を受けるときは一万円の補助を出してくれるようになりました。

第三は、組織運営として、事業所内の連帯と全国連帯を貫いたことです。

年末にも新しく上柴の事業所が出発しましたが、絶対に赤字を出さないということで、出資はもちろん、前からある「だんらん」の方の組合員の賃下げもして経営を支えることにしたわけです。本当に全員が経営を考えている「自分の経営」になっているわけです。

第四は、地域の人たちとのネットワークです。

上柴の「生粋くらぶ」では、参加している人たちの主体性が強く現れています。脳梗塞になっても、治そうと思って必死になって来るとか。利用者だった人が主体者に変わっていく。市民や働く人が地域から主体者になっていく。

これまでも、趣旨に賛同した大家さんや地主さんが土地や建物を本当に安く提供してくれています。現物出資です。参加の形もさまざまに広がっています。

子どものことでも、失業の問題でも一緒で、商店街も出資し、保護者も出資し、労協の組合員も出資し、というようなことになっていけば、地域福祉事業所は、地域のさまざまな人たちの思いが結び合い、地域で形成されているさまざまな力が、共通の目的に向かって織りあわされる場所となります。

〝人間としての生活者へ〟――その典型が深谷であり、ここで初めて、「労働の人間化」とか、「地域の人間的再生」が、ほの見えてきた。そんな気がします。

（聞き手・飯島信吾）

年表で見る
だんらんグループ

協同の仕事おこし・多機能化への挑戦
地域福祉事業所、深谷・だんらんグループ

●1987年5月に生協物流現場の委託事業からスタートした。不況の波が、委託側を厳しい現実に追い込んだ。その当時60名が組合員として働いていた。自分たちで、運営・経営に責任を持って働くことを意識して取組むことに努力して来ていた。しかし、1994年に委託の打ち切りの話が提示される。

●組合員の中から「仕事おこし」の声が出始める。「仕事がなくなるのなら、何か自分たちで新しい仕事をしたい」と、健康弁当づくり、喫茶店（人がたまれる）などの声がでるが、具体化には…。長野県北御牧村へ豆腐づくりの見学を実施する。

●「本物の豆腐づくり」をしようと組合員へ提案し、新しい仕事おこしの挑戦開始…全組合員へ参加を呼びかける。
■コンセプト、事業計画書、場所探し、宣伝方法、資金計画

●1995年6月　**「とうふ工房」オープン**
■国産大豆、天然にがり100%
■大豆栽培に挑戦――2反歩（600坪）――450キロ収穫

●1997年2月　**老人給食を目標に「愛彩」オープン**
■安心、安全、手づくりの健康弁当

●食事業から福祉への展開

●1998年1月　**深谷地域でヘルパー3級養成講座開催**
■3級、2回　■2級、1回（ヘルパーステーションを目標）
☆引き続き年間計画で実施

●1999年5月　**ヘルパーステーションだんらん　立ち上げ**
■2級修了生　20名　組合員として開始
■地域に1万3000枚　チラシポスティング
■病院、薬局、公民館、民生委員等の訪問行動

●1999年10月　**ケアマネジャー配置**
■居宅介護支援事業所として指定決定
■10月より深谷市より調査委託開始

●1999年11月　**訪問介護指定事業所決定**

●2000年2月　**「住民が選択した町の福祉」上映会と「深谷市長と羽田澄子監督」のトークショウ開催、500名鑑賞**

●2000年4月　**介護保険制度スタートで本格的事業開始**
■居宅支援　30件
■訪問介護　20件
■ヘルパー講座年間計画実施（深谷市・熊谷市）450名修了

●2000年10月　**福祉コンビニ事業の取り組み**

●2001年3月　**居宅・訪問介護の運営基盤確立**

●2001年4月　**新年度事業計画に通所介護を目標に立て計画提案**
■開設準備に向け、全組合員（物流・とうふ工房・愛彩・だんらん）で推進会議実施

●2001年7月　**通所介護事業開始**

●2001年7月　**深谷市配食委託決定**

●2002年4月　**熊谷・妻沼地域福祉事業所「ほほえみ」開所**

●2002年6月　**福祉用具貸与指定事業所開始**

●2004年11月　**深谷南地域福祉事業所「だんらん上柴」オープン**

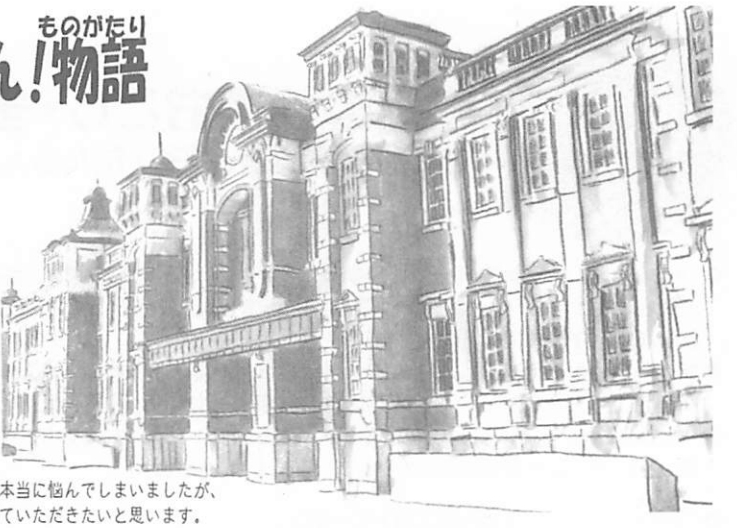
以上

物流現場委託から自前の仕事おこし事業へ展開し、これまでにたくさんの人たちと出合い・地域のコミュニティの場、そして生きがいの場としての拠点になったといえる。

一人では何も出来ないが協同労働だからこそ、こんなに力が発揮できると実感している。

爺婆爺婆だんらんらん！物語

作：くりはら だいすけ



突然ですが皆さんは埼玉県深谷市と聞いてまず最初に何を連想されるでしょうか？　大抵の人は「深谷ネギ」を連想するでしょうし、鉄道ファンや旅好きであれば右の絵の東京駅のような煉瓦造りの「ＪＲ深谷駅」を連想されると思います。もちろん以上の２つは同じ埼玉県民としてほこれる「代表的深谷ネタ」であるには違いありませんが、実は深谷にはまだまだ素晴らしい誇れるものがあったのでした。

市内の高齢者達が自らすすんで集い憩う場所。
「地域福祉事業所・だんらんグループ」の施設です。

この「だんらんグループ」は深谷市に２ヵ所、熊谷に１ヵ所、妻沼に１ヵ所の合計４ヵ所の地域福祉事業所、そして深谷市内に２つの配食事業所を運営しています。今回は何処を紹介しようか本当に悩んでしまいましたが、深谷市天神町にある「深谷地域福祉事務所」でのお話を紹介させていただきたいと思います。

廃業したコンビニの店舗を改造して造られたこの事業所に入ってみると、なんとも香ばしい香りが漂っています。何だろうと思っていたら「こんにちは！」という声が。声の方を向いたら元気なお婆さんがオーブントースターでお餅を焼いているところでした。

「御老体にお餅とは・・・そんな物騒な・・・」
＊全く余計なマメ知識：餅をつまらせて新聞記事になった第一号は足立区の栗原さんという人です。私とは関係ありませんが。

←全く刺激性ゼロですが、香ばしくて微妙に素敵。「焼き餅茶」ですね。いわば。

と思いましたが、ここの人たちは凄い！「約５ミリ角」のマッチ棒のようなお餅をタッパーに詰めて用意し。実にホノボノと焼いているのです。お餅は焼くと膨張しますが、大丈夫！せいぜい１センチ角くらいの膨張なので心配はありません。

しばらくすると、その焼いたお餅が３つほど入った温かい「飲み物」が配られました。私も御相伴にあずかり、その不思議な飲み物をいただくことになりました。しばらく透明な液体に浮かぶ可愛いお餅を鑑賞し、ゴクリと飲んでみると！皆さん何と！驚きますよ！「お湯にお餅を浮かばせた飲み物」ではありませんか！・・・味は想像できると思います。

お茶の時間が終わると

お茶の時間が終わると次に待っているのは実に楽しく、エキサイティングな時間が訪れます。今まで多くの高齢者施設を観てきましたが、目が爛々と輝き、こんなにも楽しそうに過ごしている所は滅多にないと思いました。まず最初に行われたプレイは指の運動及び、反射神経の鍛錬と思われる「１２３４、２の４の５」というプレイです。人さし指が１で中指が２というふうにヘルパーさんの言った通りの順番で指を動かして行くというものです。初心者向けに音楽でいうところの「楽譜」のような運指文が書かれた紙があり、それを見ながらやることもできます。私は思わずそれを借りて参加しましたが、難しい！でも皆さんは「シュパ！シュパ！」とやってのける！初めはゆっくりで段々速くなり、最終的にはアレグロヴィヴァーチェ（音楽でいうところの）くらいの速さまで到達するのです！その次が歌の時間です。こりゃぁ元気になるわ！

ヘルパーさんは、みな美人だ。

だんらん音頭（東京音頭の節で）

1、ハァ～！　たった一度のチョイと　人生ならばぁ～　ヨイヨイ！
華で飾ろう　歌を歌おう　花道で　サテ！
ヤットナそれ！ヨイヨイヨイ！　ヤットナそれ！ヨイヨイヨイ！

2、ハァ～！　ここに集れば　チョイと　だんらん音頭ぉ～　ヨイヨイ！
老いも若きもぉ　老も若きも　輪になって　サテ！
ヤットナそれ！ヨイヨイヨイ！　ヤットナそれ！ヨイヨイヨイ！

3、ハァ～！生まれ育ちは　チョイと　いずこの地でもぉ～　ヨイヨイ！
結ぶ手と手は　結ぶ手と手は　暖かく　サテ！
ヤットナそれ！ヨイヨイヨイ！　ヤットナそれ！ヨイヨイヨイ！

4、ハァ～！　春よ桜よ　チョイと　夏ホトトギス　ヨイヨイ！
秋は名月　冬白雪眺でながら　サテ！
ヤットナそれ！ヨイヨイヨイ！　ヤットナそれ！ヨイヨイヨイ！

5、ハァ～！今は心も　チョイと　だんらん音頭ぉ～　ヨイヨイ！
古き昔の　古き昔の　夢をみる　サテ！
ヤットナそれ！ヨイヨイヨイ！　ヤットナそれ！ヨイヨイヨイ！

一家だんらんらん（雨々降れ降れの節で）＊八代亜紀の方ではない。

1、朝からいそいそ母さんが　車でお迎え待っている
ドキドキ　ワクワク　だんらんらん！

2、あらあら父さんまだですよ　支度ができたらゆきましょう
ドキドキ　ワクワク　だんらんらん！

3、今日は嬉しい行く日だよ　指折り数えて待ってたよ
イソイソ　ワクワク　だんらんらん！

4、皆が集まり楽しみだ　皆さん宜しく頼みます
ウキウキ　ワクワク　だんらんらん！

5、唄に　体操　双六と　皆で仲良くやりましょう
ウキウキ　ワクワク　だんらんらん！

6、お昼寝　お話　ゆっくりと　三時のおやつも楽しみだ
ウキウキ　ワクワク　だんらんらん！

文字が小さくてすみません。
虫眼鏡を御用意下さい。

深谷地域福祉事業所「だんらん」には左のような書があります。私は書道にあかるい人間ではないのでどういった人が書かれたものか分かりませんが、とてもいいなぁと思いました。私は今３３歳という年齢で友人はほとんどまだこの世にいますし、死ぬということは非常に恐怖です。

この、「だんらん」のデイケアを受ける方たちは「余生」という時間を過ごしているわけです。自分がいつかそうなった時を想像すると、こういう言葉は今よりもずっと深く染み込むのでしょう。「だんらん」の精神の根底はここなのかな？
そう考えてみると本当にこの地域福祉事業所はいいものだと思いました。この事業所の前を通りかかった高齢者が自らすすんで門を叩くということにも納得です。

「だんらん」にはボランティアで手品をしたり、読み語りをしたりする人がよく訪れます。私が訪問した日はマジックと紙芝居両方をする人が来訪していました。せっかくなので私もその催し物を見学させていただきましたが、さすがに慣れていらっしゃるのかプロ並みのお手前。デイケアに参加されている皆さんはもちろん、ヘルパーさんまでも一緒にのめり込むようにパフォーマンスを楽しんでいます。

「食べ物」と「食べ物ではないもの」がテレパシーで分かるという恐るべきワザを披露している時には、何を思ったか研修で来ている青年ヘルパーさんが手をあげて「ファイナル・アンサー」してしまう（しかも不正解：爆笑）というハプニングまで起きました。もう全員が楽しくのめり込んで拍手喝采です。

こうなったら本業が「オペラ歌手」である私も血がみなぎってきました。（やばい）調子にのってイタリアのカンツォーネを３曲、それから高田浩吉の「大江戸出世小唄」「伊豆の佐太郎」も歌いました。嬉しいことに皆さんは私の歌も気に入って下さり、「もういつ死んでもよい」という言葉が事業所内に響きました。もちろんそんなことになってしまっては困ってしまいますが、ここにいたすべての人が一つになり「ここに来れば　みんな仲間」ということになったと私は思います。

グループのリーダー的存在・岡元かつ子さんは私の母と同じ歳。

すみません！全然似ていません。

岡元さんは私の母と同じ昭和２２年の生まれ。今この世の中で一番過激で活発な年代はどこか？そういうことを今から１０年近く前にアニメーション映画監督の宮崎駿氏は話していました。宮崎氏に言わせると「第一次ベビーブーム」に生まれた世代だとのこと。ということはまさに、岡元さんや私の母の年代なんですね。宮崎氏の発言から１０年経って世の中を見渡すと、なんとまだやっぱりこの世の中を中心で動かしている多くの人たちが「第一次ベビーブーム世代」の人々なんです。私は昭和４６年生まれの「第二次ベビーブーム世代」なんですが、本当に影が薄いというかなんとも情けない状況にいます。もう本当にマジでこの年代の人たちの力を見習って次の時代に繋げて行かなければならないと思っています。

今回製作したこの本はできるだけ多くの人に読んでいただきたいと思います。私が岡元さんと実際にお話したのは数分間でしたが、一見優しい気さくなお人柄と思いきや、「凛とした部分」が感じられて個人的に非常に興味を持った人です。今回の出会いをきっかけに「岡元かつ子研究」をして行きたいなぁなどとも思っています。

取材の日にお別れの時間が迫るころ、一つ気になったことがあったんです。たわいもないことなんです。携帯の着メロは何か？ということでした。岡元さんの答えは「世界にただ一つの花」でした。スマップですね。スマップは私と同じ世代。岡元さん。今後とも宜しくお願いします。

忙しいなか取材を受けて下さりありがとうございました。是非いつかお会いしましょう！今度は似ている似顔絵を描かせていただきますので・・・。（栗原大輔）

こころもからだもすこやかに

生粋（いきいき）くらぶ

●深谷南地域福祉事業所

昨年暮オープンして2カ月。
週2日、会員制の生きがい活動（名づけて生粋『いきいき』くらぶ）が行われています。
通常のデイサービスとはまたひと味違った、交流の場です。
健康づくりのほか、趣味や講座を楽しみながらすすめていくことで、
いきいきと毎日を送ることをめざすくらぶとか。
早速おじゃましてみることにしました。

■楽しんで「介護予防」

生粋くらぶのあるデイサービス「だんらん上柴」は深谷駅南口から車で10分ほどの静かな住宅街の一角にあります。広々とした敷地にグリーンの屋根、オフホワイトの壁、窓辺に白いカーテンが揺れるその建物で、玄関を入るとすぐ、そこは広いホール。すでに30人ほどの会員さんが集まって、にぎやかな話し声であふれんばかりです。「あらア、お久しぶり」「風邪、よくなりました？」など、60代から70代の参加者のはずむ声での挨拶

写真●五味明憲
文●中田かほる

両手の指を使った健康体操

もとびかいます。

早速、ホールではみんなが集まって歌が始まりました。全員が輪になっていすに座り、曲にあわせて指を動かす運動――というより、指遊びを楽しむ雰囲気です。指の次は腕、そして足……。インストラクターの役割を受け持つスタッフ、竹田恭子さんの声にも力が入ります。「むずかしいよ」「うまくいかないなあ」などといいながら、あちこちにはじける笑い声。

まさに「介護予防」はここから始まる、ということを納得させる光景がそこにありました。仲間との交流を楽しみながら、少しずつ体を動かす。「ホラ、できた」「ウン、気持ちいいね」――そんな小さなことの積み重ねが心とからだをすこやかに保つ。何より温かい雰囲気のなかに身をおくこと、そして、そこでの人との触れ合い。そのことが高齢者にとっては大きな生きがいにつながる。丸い輪の一人ひとりの笑顔が、それをよく物語っているようでした。

■生きがいの場に

この「生粋（いきいき）くらぶ」は会員制で、入会金が2000円。水曜・土曜の活動日には10時から4時まで、会員はいつでも自由にここに立ち寄って、お仲間とのおしゃべりを楽しんだり、パワーリハビリテーションのマシンでトレーニングをしたりすることができます。

導入した3種類のこのマシンが会員に大人気。筋肉の鍛錬や、動作・姿勢の改善などに効果が出て

きています。

最近退院してきた真々田恵美子さん（56）さんは、医師とも相談しながらこのパワーリハビリに挑戦して、からだに自信が出てきたと話しています。取り組むみなさんの表情は真剣そのものでした。

こうしてトレーニングに励む人、会話に花咲かせる人、そしてソファにじっと座っている人に声をかけながら、さりげなく、しかし全体をじっと見守るのはスタッフのみなさんです。

「ここにきてご自分の持っている力を再確認して、それを発揮していただく場になればなあと思うんです。新しい生きがいのためのお手伝いができれば私たちも本当に嬉しい。さらに深く地域に根ざすこと、地域とともにあるという思い、それを胸に刻んで……」と、会員さんの動きを目で追いながら、そう語るのはエリアマネジャーの岡元かつ子さん。

スタッフと一緒に座ったまま筋力トレーニング

ハーイ足をあげて

採算も大きな課題

来所する方が喜んでくださるのは嬉しいけれど、それだけのことでなく、これを事業として、きちんとした形にしたいというのもスタッフの切実な目標です。家賃、マシンのリース料など大口の出費もあり〝採算〟は現実の大きな課題なのです。

竹田恭子さんはいいます。「増えていく利用者さんに合わせて、ど

パワーリハビリで自力回復の道

こまでスタッフ構成ができるか、事業として考えたとき、それが悩みですね。いろいろな人が力を出してくださって、ここまでこられたんです。何よりある程度の部分が地域に還元できること、今はそれを一番思います。でも、まずは、この新しいデイサービスの利用者さんが増えていくことで希望がわきます。これまでデイサービスってどんなものか知らない人たちが、まずここにきてくださったことで、ひとつ大きな安心をしてもらえたんじゃないかしら」

そして所長の石原和子さんは、「ここでも訪問介護事業としてヘルパー派遣を行っていますが、昨年は、8人が介護福祉士の試験を受け合格してます。一生懸命勉強もしました。常に向上をめざして質の高い仕事をしたいんです。看護師もケアマネジャーの資格をとりましたから、4月からは居宅介護にも踏み出せるんですよ。経営は今は大変ですが、今回〝ナイトケア〟の要望にも対応していくことになり、みんなの力を寄せ合えば着実に目標に近づけると思っています」

この事業はまだ始まったばかりだけれど、やがては利用者さん自身が計画し、実行していく運営をしていきたい。みんなの力で立ち上げた事業所だから、みんなの力で大きくしていきたいですね――夢を語る所長の目が輝きます。

それも地に足のついた夢。実現の日は遠くない。スタッフの皆さんの言葉にはそんな確信を抱かせる力強さがありました。

石原所長さん

「生粋くらぶ」

会費は入会金として2000円、参加する日に500円プラス希望者には軽食を300円で提供しています。

週2回開いており、水曜日は健康体操が中心、土曜日は絵手紙、パッチワークなどの趣味の集まりをしていて、だれでも参加できます。現在会員数は約100人。

「だんらん上柴」
深谷南地域福祉事業所

現在、小規模多機能、地域密着の福祉をめざして、生粋（いきいき）くらぶ、訪問介護事業、通所介護事業、ナイトケアを行っています。

〒366-0052　深谷市上柴町西4-23-8
TEL048-551-7022　FAX048-551-7023

真剣に愛情を持って、アットホームで開放感いっぱい

デイサービス・ほほえみ

●妻沼地域福祉事業所

2003年6月1日に開所したデイサービス「ほほえみ」には、現在、妻沼町と深谷市から23人の高齢者の方が通ってきています。地域に根ざした、愛情いっぱい、まごころいっぱいのサービスで利用者のみなさんに喜ばれています。

ゆったり広々、日差しがさんさん清潔感いっぱいの部屋

デイサービス「ほほえみ」は妻沼の中心部、消防署のすぐそばの静かな住宅街にあります。建坪約50坪の平屋建て。施設の南側が駐車場兼広い庭になっているため、とにかく明るいのが自慢です。

車いす用のスロープを上り、玄関から建物の中に入ると、そこは暖かい日差しが降り注ぐ、清潔感いっぱいのフローリングの部屋。部屋の一角には6畳ほどの畳のコーナーがあり、ゆったり広々、なんともいえない開放感です。

通常の日課は、

9時半～10時　バイタルチェック（血圧・体温・脈など）
10時～11時　歌、体操など
11時～12時　お茶、創作活動
12時～14時　昼食、休憩（昼寝）
14時～15時　カラオケ
15時～16時　お茶

この間に、体調のすぐれない人以外は、順次入浴を済ませます。現在の利用者は毎日平均10人前後、職員は5人体制ですから、職員1人につき利用者2～3人の割合となっています。

写真●川地素睿・飯島信吾
文●山川弘子

ときには子どもたちと一緒に元気よく

妻沼町周辺には花の名所がたくさんあり、季節を味わいに戸外に出かけることもあります。春は桜のお花見に妻沼町町民運動公園へ、初夏は別名あじさい寺・能護寺へ、秋は岡部町・コスモス街道へ。

季節を五感で感じることのできる散策は、出かける機会の少ない高齢者のみなさんにとって格別なのでしょう。「ほほえみ」でのくつろぎの表情から、はじける笑顔に変わります。

近所の保育園の園児たちの訪問も楽しみの一つ。ひ孫と同じくらいの年齢の子どもたちと童心にかえって遊びます。

友だちと会えて、すごく楽しい

「ここに来て、みんなといろんな話をするのが何より楽しい」と話してくれたのは、今井庸夫さん(77)。週に2回、送迎車で10分ほどの自宅から通っています。取材当日は梅の花の貼り絵制作で実力を発揮。「絵もお上手だけど、こういうのもお得意なのね」と周囲から感嘆の声が上がっていました。

「カラオケが、何より楽しみ」とにこにこ顔で話す田島いと子さん(72)は、「歌詞や曲を知らなくても、自分で作詞作曲して歌っちゃう。歌ったあとは、気分すっきり!」と教えてくれました。昼食後のカラオケタイムは利用者のみなさん

手作業で頭の体操

食事介助をしながら語りかけ

がとても楽しみにしているひとときです。

手術を伴う入院でしばらくお休みしていた高田きみさん(87)は、一昨日退院したばかり。「久しぶりに来たので疲れたわ」と、いいつつも楽しそうな笑顔です。

「今日は、みんなに会えて、ほんとうに嬉しい。思い起こせば、この設立一周年記念の日も退院して4日目でしたが、連絡をいただいて出席しました。到着したら、みんなが建物の前に出て出迎えてくれて、すごく嬉しくて、泣いちゃったの。ここは、そういうアットホームなところなのよ」

■誕生秘話

もともと熊谷市の熊谷地域福祉事業所（ヘルパーステーション）「ほほえみ」で訪問ヘルパーとして活躍していた所長の吉川千恵子さん(49)。デイサービス「ほほえみ」誕生に際しては、施設の建物を探す段階から携わってきました。

「現在の施設は元縫製工場で、はじめて見たときにはかなり改修が必要な印象でしたが、妻沼町の中心部という立地のよさ、部屋の広さや明るさなどにほれ込み、地元の家主さんに、お話を伺いにいきました。すると、事業所を応援してくださるということになり、建物の改修まで家主さんが済ませてくださいました。限られた予算の範囲で、こんな広い場所を好条件で借りることができたうえに、深谷『配食サービス愛彩』や『とうふ工房』『物流』の仲間からも出資をいただいて…。あきらめずに夢を持ち続けていてよかったと心から思いました」

床も壁も、トイレもお風呂も真新しい「ほほえみ」は、こうした地域の力添えがあって実現しています。

ご近所へお出かけ。みなさん花がすきです

心とからだ、元気に

「利用者さんが、いききと変化していく。それが嬉しいですね」

仕事のやりがいを尋ねて、返って来た吉川さんの言葉です。

「自宅にこもりきりだった利用者のみなさんが、デイサービスで他の人と接するようになって、どんどん変化していくのに驚かされます。例えば家では気にもかけない洋服もデイサービスの日は、ちょっとおしゃれをするようになります。『今日の洋服、似合ってるね』と声をかけると、嬉しそうな笑顔が返ってきます。デイサービスに来るというそのことが、生きる意欲につながっているのではないでしょうか」

訪問ヘルパーとして、自宅にいる高齢者の方と多く接してきた吉川さんならではの実感です。

吉川さんは、ヘルパー歴4年のベテラン清野（せいの）満子さん(57)とともに、昨年、介護福祉士の資格を取得しています。

田野美智子さん(47)は、看護師さんですが、「ほとんど気持ちはヘルパーさんです」と話します。その証拠に「入浴介助が大好き」

「朝のバイタルチェックで問題がなければ、帰宅までに全員入浴しますが、お風呂の時間が一番ほっとするらしく、みなさん、いろんな話をしてくださって楽しいですよ」

高橋久江さん(50)は「ほほえみ」のヘルパー養成講座で資格を取得し、仕事を始めてまだ半年。「介護度と介護の大変さとの関係が、ようやくからだで理解できるようになったところです。みなさんと一緒に歌をうたうのが一番の楽しみ」と、元気はつらつ答えてくれました。

「ほほえみ」は、ベテラン職員も新人職員も「明るく、楽しく、元気に、地域に根ざした家庭的な雰囲気のデイサービスをめざして」チームワークよく頑張っています。

妻沼地域福祉事業所
「デイサービス・ほほえみ」
現在、デイサービス（通所介護事業）を実施しています。
〒360-0203　大里郡大字弥藤吾50
TEL048-567-3820
FAX048-567-3821

熊谷地域福祉事業所
「ほほえみ」
ご家庭にホームヘルパーを派遣（訪問介護事業）
〒360-0015　熊谷市大字肥塚1361-1
TEL048-599-3251
FAX048-599-3252

●安全・安心にこだわって

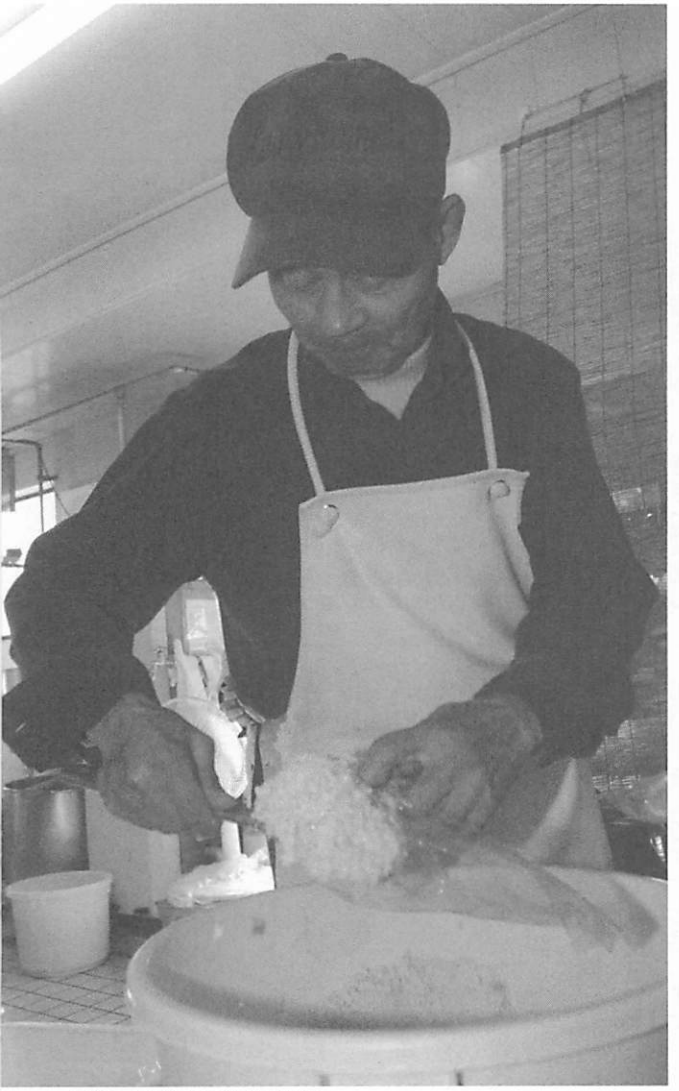
だんらんの旅立ち

10年目を迎え、地域の信頼を

とうふ工房

文●中田かほる
写真●五味明憲

埼玉県北部の深谷・熊谷・妻沼にわたる地域福祉事業所の多彩な活動、その原点ともなったのが、深谷市大谷地区にある「とうふ工房」。開業は1995年、今年ちょうど10年の節目を迎えます。



国産の大豆からこだわりのとうふへ

100軒の顧客に配達

朝7時半から始まる「とうふ工房」。朝9時の工房内は、立ち込める白い湯気、水の音、働く人たちのキビキビした動きと互いにかけ合う言葉、電話のベル、それに揚げ物のいいにおいまで流れてきて、その活気に圧倒されます。

現在ここで働くメンバーはアルバイト、パートを含め総勢9人。このメンバーが、その日でき上がった製品を手分けして、のべ100軒の顧客に配達します。作った人が直接お客様に手渡すのですから、毎日の仕事に込める気持ちが違います。このあたりが、この事業の特徴をよく表しているといえそうです。

もちろん原料へのこだわりはハンパではありません。自分たちで長野県北御牧村から分けてもらった種大豆。

愛情を込めて一つひとつつくりだす

現在は地元の農家に栽培を依頼、工房から程近い畑で収穫されたばかりの大豆を使います。それに週2回だけ限定販売する"みどり豆とうふ"の原料は秋田みどり大豆。うっすらとした緑色が優しく、見るからにおしゃれでおいしそうなお豆腐。とうふ工房ならではの心意気を感じる製品です。にがりは伊豆大島産の「海精にがり」だけで、手のかかる伝統の技法で作っています。

話し合い、励まし合いながら工房開設

「なにしろ10年前まで、豆腐作りとは縁もゆかりもない私たちが始めた事業ですからねえ」と感慨深げに話す、設立メンバーの一人、高山恵津子さん。

当時、地元生協から委託された物流の仕事に携わっていた高山さんたちは、不況の影響で、委託事業の縮小、打ち切りという現実に直面しました。仕事がなくなる！　このまま引き下がれない、何とか仲間たちと、これまで同様、協同の仕事を続けられないか、そうだ、自分たちで新しい仕事を作ろう……そんな機運が自然に高まったのです。じゃあ何を、となったとき目に入ったのが、長野県北御牧村の村おこしの記事。農家の女性たちが村おこしのために豆腐作りを始め、大豆の栽培から、製品の販売まで手がけるという。

高山さんたちは早速数人で見学に出かけ「これならできそう、やろう」ということになったのです。それからの1年間が大変でした。資金集めから、原材料の手当て、製品作りの技術の習得などに奔走し、時にはくじけそうになりながらも、それぞれの持ち味を発揮し、話し合い、励まし合いながら工房開設へとこぎつけたのでした。

心をこめた品質を地域のみなさんと

工房に設備・機材が設置されてか

ら、開業予定の日まで1週間。「とにかく無我夢中でした」とみなさん。

開業時のメンバーではないけれど、9年間、この工房で歩みを続けてきた中西千恵子さんも言葉を添えてくれました。

「プレッシャーはあったし、つらいなあと思ったこともありました。すべてが手探りでしたからね。それだけにこの事業は、本当に自分たちのもの、一人ひとりが主人公なんだという意識に支えられてきました。今は固定客もしっかり根づいて、こうなるまでにはやはりこれだけの年月が必要だったんだなあと、改めて思います」

朝は7時半から作業が始まります

そして10年という歳月は、とうふ工房の開業をきっかけとして、またその成長を土台にして、次々に貴重な事業をも生んできたのでした。デイサービス「だんらん」や配食サービスがそれです。

みなさんの言葉――「私たちの事業は地域の人たちに喜んでもらうこと。地域への還元というコンセプトは開業のときからまったく変わりがないんです。私たちが作る製品も、これまで続いて、地域のなかで草の根的に知名度はとても高くなっていると思うんです。もう一歩、これを売上げに結びつけたい。それはただ手広くして数量を増やすことではない。製品の品質に心を込める私たちの気持ちを、地域の人と共有することだと思うんですね」

とうふ工房の入口

地域や利用者さんに配られるチラシには、「ほんのり甘い大豆の香りとふんわりとしたここちよい食感はほんもののお豆腐」とアピールしています。

始まって以来、国産の大豆で子どもからお年寄りまで安心して食べられる食を地域に広めたいという思いは高まっています。ますます広がるだんらんのネットワークのなかで、さらに愛情を持って品質と手作りのよさで「とうふ工房」ここにありという姿を市民に見せています。

とうふ工房

材料から安心・安全にこだわったほんものの豆腐とお味噌をつくっています。もめんとうふ(愛彩とうふ)、おぼろとうふ、愛彩味噌、豆乳入りヨーグルトムース、豆乳、みどり豆とうふ、毎週木曜日のみ手作りがんもどきを製造・販売しています。おからは無料サービスです。

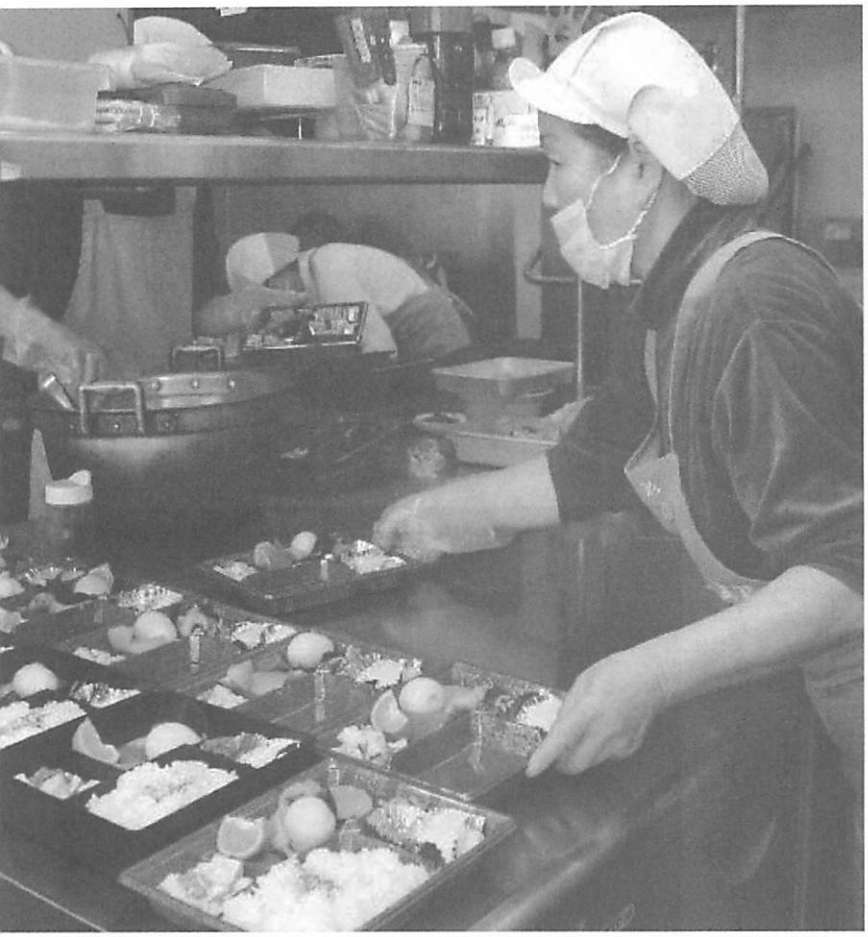
〒366-0814
深谷市大谷1548-3
TEL・FAX 048-574-4789

いいものを、おいしいものを

高齢者配食サービス 愛彩

文●中田かほる
写真●五味明憲

1日30食から始まった配食サービス「愛彩」は、
現在1日80～90食を地域の高齢者の方々に届けています。
「今日もおいしいっていってくれるかな」――その思いがあるから、
「忙しさはかえって楽しいですよ」とみなさん口をそろえるのです。



手ぎわよく愛情を込めて

時間がかかっても黒字に ――何度も討論

お米を洗うところから始めて午前11時までに作業を完了させるのは4人のスタッフ。息もつけないめまぐるしさの数時間ですが、その間スタッフの脳裏に浮かんでいるのは、このお弁当を待ちわびてくれる人たちの顔。

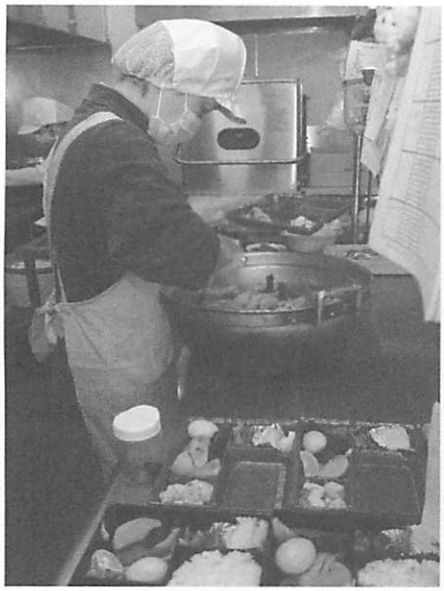
深谷市上柴の、とあるアパート1階の部屋でお弁当作りが始まったのは、1997年2月のこと。「とうふ工房」を立ち上げて1年半が過ぎ、このお豆腐やおからを使えば、高齢者に喜んでもらえる、おいしい食事が提供できる、「とにかくやってみようと、がむしゃらなまでに、みんな意気さかんでした」と、当時を振り返って、エリアマネジャーの岡元かつ子さんはいいます。

季節の野菜中心の献立、添加物のない食材、練り製品は使わず、だしは昆布と鰹節でとったものといった、安全・安心へのこだわりに併せておいしさ・味わいを追求する姿勢を崩さ

ないこと。これがスタート時から今も変わらない「愛彩」の考え方です。

2001年夏、デイサービス「だんらん」が市内の中心部に開設されると同時に、「愛彩」も同じ建物に移転、配食数も増え、市からの委託も受注するようになりましたが、〝いいものを、おいしいものを〟の姿勢を貫くために財政的には運営はラクではありませんでした。自分たちの働き方をみんなで考える、運営を黒字にもっていくにはどうしたらいいのか、ここでも繰り返し、話し合いがもたれました。

「その成果は出始めています。時間がかかりましたけど、今、黒字に転換できたところです」と顔をほころばせて、事務を引き受ける大塚良子さん。「こうなるとますます元気が出ます。1日100食。これが当面の目標ですね」


おいしくできたか確かめながら

見ばえも考えながら並べる

市の委託も受けて

もとはコンビニだった建物の1階。「愛彩」のキッチンは、道路側は店舗ふうなつくりになっています。一方の側、隣りの部屋はデイサービス、お昼近くなるとキッチンからいい匂いが流れてきて、みんなワクワク、ランチタイムがいっそう楽しみなのだとか。

デイサービスには、このほか妻沼の「ほほえみ」、だんらん上柴などにも配食しています。

配達の人たちもそれぞれ出て行って、少し落ち着いた感じのキッチンで後片付けに余念のない柿沼和子さんが話してくれます。

「いろんなお弁当作るんですよ。市からの委託30食は容器から違ったものだし、きざみ食、おかゆ、肉がダメ

満足してもらうためにもう一品そえて

生きる意欲をみなさんへ

「お元気でしょうか」と毎日、声をかけ

な人、食事制限のある人などいろいろ。ええ、もちろんお名前全部頭に入っています。その日に、こうして……と電話があることも。それから会合や会食の特注とかね」

道路に面してはためくのぼり旗、赤の地に白く抜いた「お弁当」の文字が鮮やか。これを見て車を止め、買っていくお客様もいます。ちなみに1個600円。「おいしかったからまたきたよ」とリピートがあると、これまた嬉しいんですと、大塚さん。

生きる意欲を引きだす食事を

正午を過ぎたころから、配達に出て行った人が戻ってきます。配達先はご夫婦の場合もありますが、ほとんどが一人暮らしの方だそうです。3コースに分かれ、シルバーセンターからの配達者が2人、街なかの分を「愛彩」のスタッフが届けるという体制。

配食の仕事は「配達」が実はきわめて重要な意味をもっています。安否の確認だけでなく、会話を交わすこと。「待たれている、という実感が痛切です。待っているのはお弁当だけじゃないんです」と、栄養士で、献立の作製はもちろん調理や配達もする野口照子さんが言います。

「時間に追われず、こころゆくまで会話ができたら、元気が出てもっと食べていただける。食べられる～食べることが楽しいということは、高齢の方には生きる意欲そのものなんです」と。

配達の体制も、ヘルパーの仕事になるといいのでは？　介護保険とドッキングして、高齢者の豊かな食生活が保障される仕組みが社会的にできるといいですね。行政の方にも頑張ってほしい。そんな話し合いを続けていきたいです――スタッフとの雑談ではこんな会話も交わされました。

愛彩弁当

高齢者のための配食事業を中心に、だんらん、ほほえみ、だんらん上柴のデイサービス、生粋（いきいき）くらぶの昼食を作っています。1食600円の店頭売りもあります。

〒366-0027
深谷市天神町4-35
TEL・FAX 048-574-6898

高齢者の自立を願って 100人を超えるだんらんヘルパー

介護福祉士の資格も取得して、大里秋子さん

介護保険実施の以前から1000人近いヘルパー養成を実現しているだんらんグループ(深谷地域福祉事業所など)。今では100人を超えるヘルパー集団を擁しています。自らも日々、ケア現場に入り、ヘルパー仲間のリーダー格の大里秋子さん(62)の今を訪ねました。

写真●五味明憲　文●飯島信吾

介護福祉士の資格を取得

大里さんは、2004年度の介護福祉士の資格取得にチャレンジして、無事合格を果たしただんらんグループ・8人のお一人。

「還暦を迎える60歳の記念になんとか介護福祉士の資格を取ろうと決意したんです。毎日のヘルパーの仕事もあり、夜中に問題集のテキストを開いて勉強しました。眠い目をこすって、若いときよりも前向きに意欲がわいてきて、まだ若いと自分のこころを励まし、無事合格したんです。友人たちに報告したらびっくりしていましたね」

大里さんは、5年前に近所の友人から「だんらんというところで2級ヘルパー養成講座がある」と教えられ、働きながら土日の講座に出席して、資格を取っています。

「パートに出ていたんですが、80代の母を亡くして、女性として生

だんらんで働くこと

私もひとこと

①仕事・仕事場／お名前・働き始めた時期
②あなたはなぜこの仕事に就いたのですか
③働いていてよかったこと
④出会いのなかから学んだこと

①だんらん上柴／石原和子・2000年2月
②生きがいのある人生を送りたかったから。
③多くの人との出会いがあり、向上心をもって働ける場。体力と気力があれば自分の意見がいえる場があること。
④十人十色。いろいろな生き方、人生を学ばせてもらっています。自分の老後をいかに生きるかの実践の場、学ぶ場です。

①だんらん上柴・デイサービス／竹田恭子・2000年5月、2004年11月だんらん上柴へ

生粋（いきいき）くらぶへの見学者と語らう大里さん

きがいがあり、人に役立つ仕事がしたいと思っていたんです。詳しくは知らなかったんですが…。最初のころは、パート勤めの傍ら土曜日に1回ぐらいの訪問介護に行っていたんですが、パートよりもだんらんがいいなと思って、毎日働き始めました」

利用者宅を訪問するヘルパーとして、お姑さんの生活ぶりから教えられたことが役だったといいます。

「利用者のほとんどは姑と同じ年代ですよね。ですから接しながら利用者の願っていること、掃除やリフォーム料理（食事）、節約料理の大切さが、よくわかりました。姑は細かいことに口うるさい人でしたが、それがあったから、ヘルパーになって役だっているんだと感謝の気持ちがわいてきました」と振り返っています。

ヘルパー仲間のリーダーとして

現在、ヘルパーはだんらん51人、熊谷20人、妻沼8人、だんらん上柴25人と埼玉でも有数のケアワーカー集団をつくりだしています。

大里さんはそのリーダーのお一人。2003年11月に登録型から専

②介護保険制度が始まり、どのような制度か勉強したいと思って。

③勉強になり、知識が蓄えられること。自分の意見がいえること、聞いてもらえること。仲間の意見もたくさん聞けること。自分もそうだが仲間たちも仕事を楽しみ、また悩み苦しみも共有できること。だんらんで働く以前、仕事を持っていなかった自分が働く場が持て、それが生きがいとなれたことに感謝しています。

④毎日、利用者さんがだんらんと出会えたことを喜んでいるのを肌で感じられます。楽しんでいる心がからだもよくしていくのが、目に見えます。

①訪問ヘルパー・熊谷ほほえみ／田那部モト子・2004年3月

②先にヘルパーとして働いていた母のすすめでヘルパー講座を受け登録。介護という仕事に興味があったのですが、実際にお仕事をいただいて働き始めてみると、思ったよりもたいへんなこともあったりして、愚痴などなにもいわず5年も働いている母の偉大さを感じた。

③押しつけられる仕事ではなく、自分が自主性をもって働くというのは初めての経験で、こうした仕事の仕方もとてもよいと思いました。

④まだ働き始めてから1年もたっていません。この短い間でも「がんばろう」と思ったとたんに利用者さんの入院。そしてお亡くなりになりました。訪問するのを待っていてくれる利用者さんもいるので、がんばりたいです。

①訪問ヘルパー・熊谷ほほえみ／松丸美幸・2001年4月

②いつか役立つだろうと思い、ヘルパー2級養成講座を受講。終了時に一応、登録をしました。約2カ月後、岡元さんから仕事の依頼の電話が入り、不安ながらもヘルパーの仕事を始めました。

③平日はパートをしていたために空き時間を利用して働けました。自主性を重んじてくれること。よい出会い（仲間や利用者さん）がありました。

④初めての利用者（2年ほど担当）には、最初「娘のようだ」といわれ、自分でもすっかりのめり込んでしまいました。2年半のあいだ、いろいろなことを教えていただき、彼女がいたから細々でもこの仕事をつづけられたと思います。また3カ月担当した利用者さんは、末期ガンで壮絶な生きざまを見せていただきました。

①デイサービス／ほほえみ・妻沼　吉川千恵子・2000年4月

②将来、親の介護に役立つのではないかと思いヘルパーの資格をだんらんで取得、資格を生かしたいとだんらんに

任に変わって、サービス提供責任者になっています。高齢者の自立支援をすすめるためにも、若い人たちと一緒に育ちあうためにも介護福祉士にチャレンジしたわけです。そのうえでヘルパー仲間の相談やケアプランづくりのリーダー役を担っています。

「資格を持っていてもピンからキリです。やっぱり現場に入って、利用者と向き合うことで、ヘルパーみんなと同じ状況を把握できるんです。ですから毎日、私自身が現場に入っています」

毎月1回のヘルパー全体集会や個別のケース検討会を開いて介護の統一を図っていますが、それだけでは不十分だといいます。

「私たちは高齢者の残存能力をひきだし、寝たきりにしない・させないをモットーにヘルプしています。寝たきりの人がどういう経過をたどったら自立にすすむのか、どのようにケアしたらいいのか真剣に話し合います。しかしやっぱり利用者をよく知らなければいけないし、こんなことができているというヘルパーの気づきも大事なんです。臨機応変に対応できる技術、働きかけ、次のステップを考え実践する力などは、現場で判断してヘルパーの力量アップ（スキルアップ）を日常的にこなしていかなければ、ヘルパー全体の水準を向上できないんです。スプーン一杯の介助食の仕方なども、現場からすぐに学びあう関係が大事です」

エリアマネジャーの岡元かつ子さん(57)は、「大里さんにはヘルパー養成講座の講師もやってもらっていますが、ヘルパー仲間にとっては定例会議やケース検討会での話は学びの場になっています」と話しています。

毎日、高齢者の自立を願って

これまでもたくさんの高齢者の自立支援をすすめていますが、介護度4のAさん(87)との出会いを語ってもらいました。

登録。2000年5月熊谷ほほえみへ、2003年6月、妻沼デイサービス／ほほえみに移りました。

③ただ働くだけの労働者にとどまらず協同組合の一員であり経営者でもあるということで、よりよい事業所にするため、みんなで話し合いながら一つひとつ決められること。またさまざまな研修・勉強会などがあり、自分を高められること。全国組織ということもあり、多くのすばらしい人との出会いがあること。

④利用者さんが家で見せる顔とデイサービスで見せる顔が違うということを知り驚きました(家では歌をうたったことがないそうですが、デイサービスでは声を張り上げて気持ちよさそうにうたっています)。

①だんらん所長　小松ひさ子・2000年5月

②夫の転勤で深谷に住むようになりました。以前居住していた兵庫県で社協(社会福祉協議会)のボランティア団体に所属して、高齢者とのかかわりをもっていましたので、資格を取りたいと思ったのがきっかけで、だんらん主催のヘルパー養成講座を受講してつながりをもちました。

③自分の意見が遠慮なくいえることです。会社組織のなかでの一員ではなく、自分のがんばりや熱意がそのまま反映されるところが魅力です。

④ヘルパーになりたてのころ、九州から息子家族と同居するために長年住み慣れた家を処分して深谷に移り住むようになったEさん。私も九州出身なのでだんだん心を開いてくださるようになりましたが、歳を取ってからの転居がどれほどたいへんなことか思い知らされました。私の両親も九州で2人で生活をしています。慣れ親しんだ環境で元気に暮らせるということが、どれほど幸せなことかと痛感しました。

①ケアマネジャー・だんらん／野村時子・2002年3月

②1999年～2000年、義父の介護のことで役場・社協に相談に行ったところ、質問したことへの答えのみ。助言もしてもらえず何一つ情報を教えてもらえなかった。申請すれば身障者制度の援助もあったことも亡くなる1年前に知ったり、……金銭的にも精神的にも、とても損したことも体験しました。私が知った情報や知識を少しでも役に立てることができればと思い仕事を始めました。③自分が利用者さんのために……と思っていることが言葉に出せて、実行できることです。

④1人で孤立してしまっている利用者さんや早急に援助が必要な人をか

Aさんはターミナルケアで病院から在宅に戻ってきた人です。戻ってきたときはなにも食べず点滴の状態で、家族は静かに見守りたい、なにもしなくてもいいという判断を示していました。

ケアに入って、Aさんは大里さんに「死にたいよ」とポツリ、語りかけました。

「私にはAさんのこの声が〝生きたいよ〟と聞こえたんです。これはヘルパーとしての直感でしたが、元気になりたいという叫びだと思ったんです」

Aさんの訴えかけは、感情を表出するプロセスの始まりだと気がつき（悲しい、苦しいということを表現する力は自立の一歩）ケアに入りました。

大里さんたちヘルパーは、Aさんの〝この世の居場所〟がないことで断食（ご飯を食べなければ死ねる）をしているのではないかと判断し、少しずつこころの扉を開けるコミュニケーションを行い、どんな形でも生きていてほしいと語りかけました。生きる意欲をなくしたAさんの心の中には、お嫁さんとの軋轢などもあり、長男の家に帰れず、次男の家にもどる悲しい事実があったのです。

ヘルパーたちはAさんが少しずつ水分を取り始めてきたので、往診の医師とも相談して、点滴をはずすようにしました。

Aさんは「生きていてもいいのね」と何度も何度もヘルパーに語りかけ始めました。水分を取り始めたAさんにおむつはずしを目標に、体位交換などで体を動かして、心身の活性化を促していきました。次に座る準備から座位、端座位（ベッドの端に背もたれなしで腰掛けた状態）、と立って歩く準備を施し、本人の自信も深まり、立って歩けるようになっていきました。

「家族には連絡ノートで、毎日の変化（自分で水分を取り始めたこと、流動食をとっているので材料を用意してほしいことなど）を書きかえて困っている家族が、解決の糸口を見つけ、サービスにつながったときの喜びや感謝の言葉をいただいたときが最大の喜び。

①ケアマネジャー・だんらん／深谷すゑ子・2003年9月

②子育てで忙しい時期にも遠く離れていた両親のところに子どもを連れてよく遊びに行きましたが、亡くなりました。亡くなった母はよく「嫁には迷惑を掛けたくない」とよくいいましたが、そのとおり人生を終え、子どもたちにもまったく迷惑を掛けずに一人でがんばって人生を終えました。父も同様で親のそんな姿を見ながら子育てが終わり、何を目標に生きていこうかと取り組んだのが、「人とのふれあい」でした。人の役に立てるかどうかについてよく自分でも考えますが、「人の人生設計の中でわが家で死にたい」と希望する人たちの最後ののぞみを、少しでもかなえる役割に参加できたらと思っています。

③ヘルパーの仕事のたいへんなことは、みんな同じだと思います。仕事の大きさ、不明確さ、答えがない困難さに、一人ではどうにもならないことばかりですが、介護を自分で実践し、まわりにたくさんの介護のプロがいて、さまざまな利用者の方の生活スタイルを教えてくれるので、一人ではできないこともまわりで支えていただいている。その大きなバックがだんらんにはあり、チームワークもとてもよくとれていると思います。子育て中の人から子育て完了の方まで、いろいろな性格の人が表面には表さなくても、仕事に役立つ特技を発揮してくれるので、未熟な私でも多くのだんらんの方や利用者様に支えられて、励まされて働いていられると思っています。

④以前はやや小都市の都会型で働いていたので、生活スタイルが深谷の方とはかなり異なっていまして、非常に割り切って仕事をしていました。現在は、生活の援助が必要な状況の方から、こちらに働きかけに非協力的な方まですべて一人ひとり個性を持っている人ばかりです。その生活状況のなかで優先順位を考え、どのようにお互いの信頼関係をつくっていくかのなかに、さまざまなトラブルと感動が混じりあい、喜びとむなしさを痛切に感じています。

①だんらんデイサービス／田中正子・1999年5月

②前の会社で若い人が入社して、どうしようかと思っていたときヘルパー養成講座を受講。岡元さんの意見に賛同してこの仕事に就きました。

③みなさん、すばらしい人ばかりで仕事をしていくことが楽しく、勉強の

込み、家族も日々の回復に驚き、大きく意識が変わっていきました。三者の信頼関係も生まれ、自立へとすすんでいきました。いまでは完全自立の生活にもどっています」

だんらん流の働き方こそ一番

大里さんは、だんらんのようなワーカーズコープの働き方が一番だと強調します。

「以前は竹内孝仁先生（国際医療福祉大学教授・パワーリハビリテーション研究会会長）の本などを読んでも理解が不十分でしたが、いまでは実践の中でその理論を検証できるようになりました。

ヘルパーさんはまだまだ報酬などでは不十分です。しかし高齢者の残存能力を引き出し、自立支援をする労働ですから、お金儲けをしようとかお金のためにパート感覚でいいとかいうわけにはいきません。

営利のためにヘルパー労働したら、時間の中でマニュアルに基づきおむつ交換だけしていればいいとなってしまうし、気がついたことをはっきり主張できないのではないでしょうか。

利用者本位の介護をすすめるには、自分たちが雇われているのではなく、みんなで話し合い、協同して実践し、力を発揮できるだんらんみたいな仕事場が一番いいと思いますよ。

ヘルパーは利用者からの感謝だけで満足をしてはならない、もっと奥深い人間と人間のつきあい、絆を深める奥深い働きです。そこからヘルパーのやりがいが実感できるのです」

ヘルパーとして人間として、自らの働き方と自らの展望、事業のありようについて自信を持って語り始めている大里さんの姿は、必ず社会的な共感を生みだすに違いありません。

チャンスが多く、自分も少しは成長できる気がします。

④寝たきりの人が元気にデイサービスに来られるようになったこと。

①だんらんデイサービス／中川陽子・2000年

②親の介護のこともあり、ヘルパー養成講座を受け、働き出しました。

③働いている仲間が人間的で、困ったことも相談できること。

④96歳の利用者さん。いつも穏やかで返事も「は～い」と気持ちがよく、みんなが一目置いています。この方がこられると、どことなくなごやかな感じがします。

①だんらんデイサービス／川上幸子・2001年

②ヘルパー養成講座を受け、勉強しているうちにすばらしい仕事だと思いやってみようと思いました。

③先輩の人たちがみなさんおだやかでやさしい人なので、だんらんでよかったと思っています。

④いろいろ勉強させていただくことが多く、これからの人生などを客観的に見られるようになりました。

①だんらんデイサービス／須々美利子・2000年

②母の入院中の看護師さんの接し方を見ていて、私もそのような仕事にかかわってみたいと思いました。

③利用者さんと家族のかかわり方（関係）がいまの心身の状態に反映しているように思えます。

①だんらんデイサービス／榎本幸子・2000年

②介護の仕事をしたいから。

③常に会議を開いて、向上心があること。

④利用者さんに「だんらんに来てよかった」といわれること。

①だんらんデイサービス（生活相談員）／山田弘子・2000年

②他にできることがありません。

③利用者さんたちと一緒に笑えること。

④それぞれの場面が印象に残っています。

①だんらんデイサービス（看護師）／広田ふじみ・2001年

②知人の紹介です。年齢制限がないこと。

③自分の体調がよくなったこととスタッフの方向性（考え方）が同じなので。

④みなさんまじめにしっかり生きてこられたことも知り、自分の生き方を考えなおす機会となっています。

"新しい公共"をひらく 深谷・だんらん

文● 日本労協連理事長 菅野正純

はじめに――「だんらん上柴」に見る深谷の到達点

2004年12月、深谷地域福祉事業所"だんらん"の新しい拠点「だんらん上柴」が発足した（以下、『日本労協新聞』04年12月5日号より）。

「1千人近いヘルパーを養成し、そのヘルパーさんたちと自分たちの地域で本物の介護をしたいと5年前にヘルパーステーションだんらんを立ち上げ、今日4つ目の地域福祉事業所を立ち上げました。介護保険事業と生きがい活動を2本の柱に、地域の元気を支え、地域で暮らすことを支援し、地域にも支えてもらえる場所にしたい」という岡元かつ子さんの挨拶が、だんらんの到達点を物語っている。

「だんらんデイの利用者は、介護保険受給者だからここに来れます。でも労協がめざす『自立』になったら、どうすればいいのか。元気になってしまい、どうしようと思っているとしたら、なんて寂しいことでしょう。『だいじょうぶですよ。こんな場がありますよ』と言いたくても、それって事業になるわけないし…夢だと思っていました。／それが仲間の支えで実現。だんらんの仲間づくりが地域へ、社会へと広がっていく。介護予防、自立支援、コミュニティケア、地域福祉へと。私たちがやっていこうとする事が、新しい言葉と内容を生み出すんですね」と竹田恭子さん。「協同労働」はいま、だんらんの中にしっかりと根づいている。

新しい仕事をおこすたびに、みんなで出資をやり遂げ事業の立ち上げ資金をつくって仕事を広げる――「ぜったいに赤字を出さない事業所」の伝統を守って、今回も500万円の出資金を集めると同時に、先発の「だんらん」のヘルパーの仲間も時給を100円下げての、連帯した仕事の立ち上げだ。「みんなで頑張ってもとの時給に1日も早く戻そうよ」ということを確認しつつ。この姿があればこそ、利用者も、地主さん・大家さんなど地域の人々も、わがこととして立ち上げに協力してくれる。営利企業ではありえない、「ワーカー、利用者、地域住民の協同の経営」が、深谷の地域から登

場し始めた。

池上先生からいただいた「公共目的を実現する労協」という示唆

本稿は、「新しい公共」の創造の視点から、だんらんのあゆみの意味を考えるものである。

「公共性」と協同組合、労働者協同組合との関係について、われわれは、池上惇先生から、15年以上前の『福祉と協同の思想』（青木書店、1989年）のなかで、早くも次のような示唆をいただいている。

――「日本国憲法は、国民の政治・経済・社会の各面に渡る権利を拡充し、公共の福祉や社会の福祉を発達させる上での、政府・自治体の財政責任をも明確にした」。「このことは、協同組合が行っている雇用保障や福祉の保障、健康の増進、文化の発達について、中央政府・地方自治体が責任をもってこれらを支援しうるし、支援すべきことを意味している」。「協同組合運動は、『行政の谷間』にある住民の要求を、協同の力でとりあえず実現しつつ、行政の公的責任を認めさせ、公的な資金を導入させ、『住民要求と公共機関を結ぶコーディネーター』としての役割を果たすことになる」。

――「第一に注目されることは、労働者協同組合が自分たちの事業を、（「よい仕事」をおこし、「町づくりをめざす」という――引用者）地域社会の公共目的に合致した仕事を実現してゆくものであることを明確にしたことである」。労協は「医療廃棄物の安全管理を通じて、労働をより人間的なものに近づける」ことを示した。このような実践から「地域の人々が協同組合に理解を示し、この組合を地域や自治体の貴重な協同の財産として守り、発展させていこうという機運がつくりだされ」「地域住民が協同組合に官公需の合理的配分をする」ようになれば、「公共の資金によって『仕事の発見』が支えられ、就業の権利と『よい仕事をする権利』『人間らしい仕事を求め、実現する権利』はさらに拡充する」。

労協がまだほんの萌芽の頃に出された、驚くべき卓見と言わなければならない。池上先生はまた、今日の地域福祉事業を予見するかのように、次のようにも述べられている。

――「保育産業、シルバー産業、保険産業など、本来、総合的に生命を守り、育てるはずの福祉行政が、『個別の利益団体』によってバラバラにされ、金銭欲の対象とされてゆく」。「現状の財政危機下において教育・福祉の充実をはかりうる唯一の方向は、地域住民の自発的な協力・協同による教育・福祉の発展と、それを支えうる補助金、減免税措置の発展でなければならない」。「協同組合所有が地域開発政策全体に拡大されれば、日本の地域社会における納税者主権は、さらに強固なものとなる」。

だんらんの人々が切り拓いてきた「新しい公共性」へのあゆみ

深谷・だんらんの仲間たちは、まさに池上先生の言われる方向に向かって、一歩一歩あゆんできたといえる。

最初の動機は、子育てのなかで出会った、健康・安全な食べものを追求する生活協同組合に関連した仕

事をしたい、ということだったのかもしれない。半ば偶然のように労働者協同組合と出会い、（永戸さんたちとの）侃々諤々の議論を経て、「人間が協同して経営し労働する」あり方が、気持ちのよいことであり、自分たちでもできる、そうした働き方こそ、考えてみればむしろ当たり前のことだと、認識が発展する。

生協の仕事が削減されるという事態に直面して、本当に主体的に「仕事をおこす」ことに挑戦する。北御牧村の女性たちや地元の豆腐屋さんから教わり、協力をいただき、大豆のことも豆腐の製法も、自分たちで学び、農作業もやって仕事を立ち上げる。主体者になる学びと、生まれ変わるような変化があったと思う。

仕事をおこそうと思えば、地域に暮らす自分たち自身の思いや願いとそれは直結してくる。仕事とくらしがつながっている。そして、大豆をつくってくれるようになった地元の農家、おからをエサに養鶏をし、卵を供給してくれる授産所の人々など、仕事と仕事もつながりあっている。孤立し競争し排除しあう関係でなく、「地域・循環・共生」の仕事の連鎖が生み出される。「地域の産業と経済の再生」「地域再生・就労創出」というとむずかしそうだが、こういうことなのではないか。

そして、地域福祉事業所へ。ほんとうに必要とされているケア――人間の自立と尊厳を支えるケアは、「自分もさびしい老後を送りたくない」という思いを持つ当事者によってこそ、よりよく実現できる。そのケアは「生活総合産業」へとつながり、地域とくらしにかぎりなく開かれ結び合っている。そして、1000人に近いヘルパー養成、各地の仕事おこし講座での岡元さんの講義。深谷・だんらんは、人々の学びと勇気と仕事おこしの一大センターとして成長を続けている。

一つの地域福祉事業所で得られた、貴重なさまざまの資源――協同のチームワーク、培われたケアの心と技術、人間観、人材、資金、経営ノウハウが、もう一つ、またもう一つの地域福祉事業所づくりに活かされていく。働く人々の協同、利用者・生活者、地域住民との協同のなかで、「仕事をおこし、地域をつくる」住民の共有財産、公共財産が草の根から生み出され、育まれていく。首長さんをはじめ、自治体がこの営みを正当に位置づけ、これをサポートして自治体あげてのユニークな公共政策に高めていただく日が遠くないことを切に願う。

いま問われる地域・地方からの「新しい公共」「協同と公共の複合体」

いくつかの地域を訪問し、首長さんたちとお話しをさせていただくなかで、いま地域・地方が、「新しい公共」「協同と公共の複合」を切実に求めていることを実感する。地域・地方が今度こそ自立しなければならない。地域・地方が自立するためには、地域住民が自立し協同しなければならない。地域住民自身が、地域のくらしに根ざして、地域住民の目線から仕事をおこし、地域福祉を高め、地域の共有財をつくりだし育んでいかなければならない。深谷・だんらんの教訓が、確実に生きてくるだろう。

問われている第一の「新しい公共」

は、仕事おこしと、人間の自立・就労支援だ。

『希望格差社会』（山田昌弘著、筑摩書房2004年）という本が出た。労働のリスク化と二極化の進行とともに、所得格差だけでなく、自分の人生に希望を持てない多数と希望を持ちうる少数者の格差が拡大しているのだ。雇用失業問題の質は、すでに根底から変わった。直撃されているのが若者たちだ。働く人々・地域住身自身が、腹をくくって地域の仕事とくらし、仕事と仕事の循環をつくりだす以外ない。教科書のない、面白い時代ととらえればいい。

求められる第二の「新しい公共」は、「介護予防」「コミュニティ・ケア」から「地域福祉社会」創造への全面展開だ。

第三は、「指定管理者制度」「公共業務の営利化・企業支配」を克服して、「地域共有財・公共財」を人間の発達と、仕事・くらしの発展に生かす、「人々がつくる新しい公共」を確立することだ。「地域開発」「バブル投機とその破綻」「公金による銀行・ゼネコン救済」等々で、公共財政を食いものにし、「国家破産」を生み出した営利大企業が、「公共業務を効率化する」という。これ以上の「悪い冗談」「稀代のサギ」があるだろうか。住民の税金によって形成され、「住民の福祉に資する」「公の施設」を管理し、正しく活用する主体は、地域住民自身なのだ。地域住民の協同と、それをコーディネートする自治体職員の連携が、新しい公共を確立するだろう。

公共業務の営利化、少数の官僚と癒着した大企業支配は、日本国憲法の「主権在民（当事者主体）」「基本的人権（人間の尊厳）」という根本原理をわれわれに問いかけ、「戦争と暴力の克服」という歴史的課題への覚醒を喚起する。そのさらに根底にあるのは、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学法学教授、ジョエル・ベイカン氏（『ザ・コーポレーション』早川書房、2005年）によれば、われわれの人間観そのものだ。その引用で、本稿を閉じることにしよう。

――「民営化推進論者は、利己心に訴えることが公益促進の最も確実な手段だという」。「『近所の寡婦がちゃんと食べていけるだろうか』『あの子はちゃんと学校に行っているだろうか』などと心配することは、余計なお世話だというわけだ」。「公益というものが存在するという考え方、個人の利己心を超越した共有財産があるという考え方そのものが揺らいでいる」。

――「利己心や消費者としての欲求は、それ自体恥ずべきことでないが、私たちのすべてではない。人は互いに深く思いやり、結ばれあってもいる。より良い世界のために、運命や希望を共有してもいる。価値、能力、美意識、物事の意味や正義は、コミュニティとの結びつきによって生まれ、育まれていることも、われわれは知っている」。「企業の支配に対抗する最上の方法は、人間の本質に目覚めること。企業によるドグマがどれほど人間を見損なっているかに目覚めることなのだ」。

やるしかないでしょう。

みんなで決めてみんなですすむ 人間として・女性として、岡元かつ子さん

写真・文●松沢常夫

「最初、生協委託の仕事だけのときは60人が最大でした。そこは20人に減ったけど、豆腐事業を立ち上げ、お弁当、訪問介護、デイサービスと広がり、熊谷・妻沼にも拠点ができて働く人は130人を超えています。すごいでしょ」

生協物流もみんなの力で（岡元さん・1987年）

ヘルパー講座と結んだ「仕事おこし」の特別講義で、〝だんらんグループ〟のリーダーである岡元かつ子さん（57）は「すごいでしょ、すごいでしょ」と繰り返す。自画自賛なのだが、ちっとも嫌みがない。

「なぜそこまで」と教訓を聞かれても、答は「協同だからできたんです」というだけ。どうみても〝普通のおばさん〟という感じだ。

委託事業で全組合員経営

子育ても、食品づくりも、が生協

岡元さんは鹿児島市の西隣に位置する日置郡吹上町の山奥で生まれた。家は農家。父親は消防団長も務めていた。にぎやかなのが好きで、何かというと、人を寄せてはお酒を酌み交わす。とくに出初め式の日は、みんなを家に呼び、母親がつくったそばを振る舞い、祝うのが恒例だった。

そんななかで育った岡元さんが見合い結婚し、移住したのは千葉県船橋市。見ず知らずの土地だったが、生協の班で仲間ができ、長女が生まれると、楽しく子育てができた。

ところが、10年ほどして埼玉県比企郡嵐山町に家を建て引っ越すと、回りには何軒かの家がポツンポツンとあるだけ。この地で、9歳離れた長男が生まれた。この子のためにも生協の班をと、家が建つたびに、子どもがいそうな家かどうかをみながら訪ねていった。

班ができると、自宅を共同購入のステーションにした。1週間に1回の仕分け

作業は、子育て談義の場となり、どこかへ出かけるときは「いいよ、みててあげるよ」と、お互いに子どもを預けあう関係もできた。料理教室をしたり、クリスマスケーキを作ったりと、〝おいしいものを一緒につくるたまり場〟にもなっていった。

商品検討委員として、地元の零細業者を訪ね、安全・安心な食品づくりを依頼し、試作品を検討することも経験した。

「子育ても、食品づくりも、地域で支え合い協力しあっていくのが生協だ」

岡元さんはそう思っていた。

笑いが絶えない事業所委員会（1988年）

センター事業団は文句いう対象

子育てが一段落したとき、職場でも自分たちの力を発揮したいと考えた。しかしそこは、地域のように自分たちの思いをストレートにぶつけられるところとはとても考えられなかった。そんなとき、近くに生協の共同購入物流センターができた。1987年のことだ。

共同購入の各班への商品仕分けと配送を行う施設で、ここの業務の一部を労協センター事業団が受け持つことになった。

当時は人手不足の時代だったが、労協の30人枠に200人も殺到した。しかし、生協と労協の区別がつく人など皆無だった。岡元さんたちも生協パートの募集と思い、地域の生協組合員仲間5人で応募、面接の際にはこんな注文もつけた。

「せっかく5人で来たので、働けるのなら5人一緒にしてください。落とすのならみんな落としてください」

岡元さんたちは採用された。

「労協では〝雇う・雇われる関係〟はない。短時間就労でも、パートという〝部分人間〟のような働き方ではなく、組合員となり、主体者として働く」というような説明を聞いて、〝ここなら自分たちの意見もとりいれられるのでは〟という期待を抱くことができた。「よい仕事をし、よい地域をつくる協同組合間提携の事業」という話にも共感できた。

しかし、生協に雇われ、生協パートとして働く、ということと、委託を受けた労協で働くこととでは、かなりの違いがあった。

商品を棚からとり、コンベアを流れてくる箱に詰める作業は生協パートの人たち。その棚に商品を補充していくのが労協組合員の仕事なのだが、棚を境に補充の側は作業空間が冷蔵庫のなかのようになっている。冷凍室内の作業もある。労働条件が良くなく、重労働。

真っ先に吹き出した問題は食事。同じ食堂で昼食をとるのに、生協パートの人たちは生協の補助があって200円。事業団は500円。

「え～っ！おかしいじゃない！　私たちにも300円の補助をつけてよ。どうしてつけられないの。同じ協同組合じゃないの」

生協には主体者として加わり、創り、担ってきた岡元さんたちだが、「採用」された労協センター事業団は〝文句をいう対象〟でしかなかった。地域の必要に応える総合的な事業・運動の展開、そ

れを支える組織づくりなど、考えてもみない段階だった。

主体者への一歩一歩

こうした状況が変わっていったのは、一つには、労協らしさを追求した現場運営と会議の積み重ねによる。

2週間に1回、事業所委員を中心に職場会議が開かれ、全団員集会も月1回は開かれた。仕事の改善についてもみんなが考えられるようにと、〝冷蔵庫〟のなかでの作業、お米など重たいものを積む作業など15種類の仕事を2カ月間に全員が体験した。

会議では、労協とは、労協の働き方とは、ということが繰り返し話された。

〝パートで働くのになんで会議なんて必要なのか〟という人もいたが、ここで働く意義を絶えず問い返し、一人ひとりが働き方を文章にしたこともあった。「働く人たちが主人公になる」という考え方は、少しずつ理解されていった。

決定的なのは、センター事業団の本部スタッフと何でも言い合える関係がつくられていったことだ。

40歳前後で、同世代ということもあったが、事業所委員メンバーと永戸祐三専務（現在57）とは、会議の後、いつも呑みながらの〝延長戦〟に入った。その一端を日本労働者協同組合連合会の「日本労協新聞」（89年5月15日号。当時は「じぎょうだん」）が報じている。

先鋒は横倉しず代さん（その後、東京、東関東で介護分野の先進を開く）。

「15人でやる仕事を9人でやるような極限的な状況。あなたはそういう現実を知らないでしょ」

「現実か理想か、ではないの。自分たちでやろう！という軌道に立つかどうかだ」

「私なんか、余った時間を使って家庭を守るためにパートに出ているだけだもの」

「どうしてもっと本物になろうとしないの。『本当にこれをやりたい』といえば、夫も子どもも『がんばれ』といってくれるのでは」

「ただでさえ人が足りないのに、今度、小学校に入学する子をかかえた人には、送り迎えの時間を保障しなければならない。どうしてくれるの」

「そういう言い方はあまりにもさびしすぎる。みんなでささやかでも入学のお祝いをしよう、という話がまずあって、送り迎えのときの仕事の段取りはどうしようか、という話になるのが当たり前でしょ」

このとき岡元さんは、自分たちの現実を訴える横倉さんの話に〝その通り〟というなずきながら、永戸さんの話にも引き込まれるものを感じていた。

「冷凍・冷蔵庫の仕事で、ふだんでも人が足りないなかで休みがでる。残った人にふりかかる。だから文句をいった。だけど、永戸さんにいわれて、ああ、そうだなというのもあったんです」

現場では、この年、入学祝いに住井すゑさんの『わたしの少年少女物語』の本をプレゼントした。

岡元さんは、新しく入った人が子育てのことで休まなければならないとき、「大丈夫。みんなやりきってきたんだから心配しないで」と励まし、前からいる仲間には「子どもが小さいうちはしょうがないよ。そこはさ、みんなでなんとかがんばろうよ」と説得した。小さな子をかかえた人が休む時にあった、「まったくう！」という非難の言葉は、いつしかなくなっていた。

金銭に関する実務も分担

92年から金銭に関わる実務もみんなが責任を持ち、分担してやるようになった。このことが主体者意識を一段と高めた。

終礼時に、お互いに確認しながら、自分はどういう仕事で何時間働いたかを作業日報に書き込む。それを月ごとに班長がまとめ、会計担当が全体の表をつくる。これを契約書にある設定時間と比べると、どのセクションにどのくらいオーバー時間があるかは一目瞭然となる。作業日報ではまた、各部署の作業の流れも把握できる。これをもとにすると、問題点と原因の究明がしやすくなり、無駄な投下労働もなくせるようになった。

会計を担当するようになった大越ヨシさんは「お金の仕組みが見えるようになったら、いっぺんに事業所の運営が見えるようになってきた。こうすれば給料も上げられるんじゃないか、とか」と語っている。（「日本労協新聞」94年5月25日）

この結果、みんなが自分たちの部署の効率を気にするようになり、15人体制から17人体制にして「穴埋め」をうまくやれるようにする、早出をなくす、などの改善策を生み出し、原価率を下げ、わずかだが賃上げも実現することができた。

労協では「全組合員経営」ということがいわれていたが、誰かが作った「経理」を公開することにとどまらず、「私はこの仕事でこれだけの時間働きました」と情報として発信し、それを付け合わせ、運営や働き方、賃金も検討していったのだ。

こうしたことを「命令され」「やらされる」のであったら、〝なんでそんなことまで〟と反発されたことだろう。だが、そこでは「働く喜びが違う。責任を持つ働き方をするというのは、大変だけど、気持ちよかった」のだ。

そんな現場に変わってきたから、いいかげんな働き方をする人には、正面から対決できるようになった。

時間があれば、プラットホーム（トラックに商品を積み込む場）に座ってタバコを吹かしている男性の常勤者に腹が立ってきた岡元さんは、「そんな働き方はおかしい」と迫った。相手は「安い給料だから当然」と開き直る。

「なんなの！　男のくせに、ぐちゅぐちゅと。なんで会議の場でいわないの。まして、あなたたちは常勤でしょ。責任をもってここの仕事をしなくちゃいけないのに、おかしいじゃないのよ」

岡元さんが初めて怒鳴った場面だった。

93年から94年にかけては、労協が中心になって製作した映画『病院で死ぬということ』（市川準監督）の上映運動に取り組んだ。2回の上映会で800人を超す観客を集めたが、これは、みんながはじめて「外」に労協を語る場となった。

このとき、組合員にはチケットをまず3枚ずつ渡した。「1枚は自分、あと1枚家族に勧められれば上等、もう1枚他人に売れればもっといい」と言って。

「まず1枚がカギ。1枚でも売ろうとすれば、映画の内容もいわなければならないし、自分はこういうところで働いていて、こういう働き方だ、ということも話すことになる」――この狙いは的中、取り組んだみんなが労協センター事業団で働いていることに誇りを持つようになってきた。みんなが協力して一大事業をやりとげたことにより団結も強まった。

生協、障害者団体、保育団体などの方々と実行委員会を組み、50以上の団体を回り、たくさんのつながりができたことも、その後の展開を支える貴重な財産となった。

順風満帆、実は委託打ち切り

そうしたなかで93年11月、岡元さんが事業所長の任についた。本部から派遣された所長でなく、現場から生まれた

初めての所長だった。

本部から要請されたとき、「とんでもない」と断った。公務員だった夫からも「とんでもない」と反対された。夫には、働き始めるときでさえ、「家の食事づくりは手を抜かないこと」という条件をつけられていたのだ。

「旦那が認めない？　認めなけりゃ自立しなさい。『私、やります』といえばいいだけだ」

永戸専務にあっさりいわれると、「そんなこといったって」と弱々しく反論するしかなくなる。内心では、労協という組織は「口の立つ」人でなく、ひたすらまじめに働く自分のような人間を評価してくれるところなんだな、と、あらためて見直してもいた。

岡元さんは、「協力するから」という現場の仲間の声に押されるようにして決断した。

このころ、仕事も急増した。取り扱い品目が増え、2本だった仕分けラインが3本になり、産直野菜セット作業も新たに始まった。年間6000万円台で推移していた事業高は、93、94年と9000万円を超え、就労者も60人を超えた。

いよいよ全面委託が実現するかもしれない。そんな期待さえ感じられたが、事態は表面の流れとはまったく逆に動いていた。

生協は、不況の中で大きな生協との合併を決め、その前段階の品目合わせの過程で一時的に事業が急拡大したに過ぎなかったのだ。

94年の半ばから業務は縮小された。野菜セットはわずか1年でまた別の配送センターに移され、そこだけで14人工の仕事がなくなった。

「私たちは大変な仕事をみんなでがんばってやってきた。評価も得ていた。それなのに、なんで切られなくちゃいけないの。生協は経営が厳しいといったって、パートの人なんか、仕事が早く終わっても時間まで待ってタイムカードを押していたし、10年勤めたらハワイ旅行だったし。そういうのを見ていたから、よけい、〝ひどいじゃない〟と……」

しかし、所長としては、「ひどい！」といっているだけではすまない。

「協同組合だから、みんなで責任を負うということだけど、仕事がなくなるときの所長というのは、やっぱし、この人たちをどうしよう、どうしようと。それはすごい責任を感じましたね」

そんな思いのなかから、今度は、切られることのない自前の仕事、自分たちがやりたい仕事を自分たちでおこそう、という声が出始めた。

これまでもセンター事業団本部から「外に出て仕事を増やさなければ」といわれ続けていたが、岡元所長は「今でも精一杯。外に出て仕事をとってくるなんて、とても考えられない」と、聞き流していた。仕事が切られることになり、〝まじめに働いて小遣いかせぎができればいい〟というレベルに止まることができなくなってはじめて、仕事おこしを考えるようになった。

地域全体視野に自主事業

ある日、シーンとなり、「白紙に」

もともと、生活者としては、地域に根付いている女性たちだ。いざ仕事をおこそう、となると、「喫茶店」「お惣菜屋さん」「お弁当屋さん」「老人給食も」と、自分たちでできそうなものが出てくる。「夢として」ということだったが、「ヘルパーなども」と、地域の生活全体が視野に入れられていった。

たまたま、長野県北御牧村の主婦た

ちが1万円ずつ出資して村おこし事業として始めた豆腐づくりが順調だという情報を得、希望者8人で訪問した。国産大豆で、本当においしい豆腐。隣り町からも買いに来る。1日に600丁を売って20人ほどが給料を得ている。

「おいしいもの、いいものをつくれば、やっぱり買ってくれる人はいるんだ！」

岡元さんはそう直感した。それは、本物、まともなものを子どもたちに食べさせたいと、生協運動をやってきた人からすれば当然の生活感なのだろう。

北御牧の人たちからは「豆腐づくりは、にがりの打ち方だけ覚えればできる」「あなたたちは協同組合だからもっといっぱい力が出せる。きっともっといいものができる」と励ましてもらえた。

帰りの車中では、見学者全員が「これならできる！」と興奮していた。

4時に仕事が終わってから「新しい仕事をおこす話し合いの場をもちます」と呼びかけると、ほとんどの組合員が集まってきた。

「これならやれる、これをやろう！」熱のこもった提起に、出る意見も前向きだった。「ニーズはあるのか」「大豆はどうするのか」「お店はどこにつくるのか」。質問も次々に出た。

何回か会議を重ね、「赤ちゃんからお年寄りまで食べられる、昔ながらのお豆腐」というコンセプトも決め、当初の経費見込み800万円のうち200万円は自分たちで出資し、あとの600万は積み立てたお金と本部からの借り入れでまかなう計画も立てた。出資は平均すると、1人3～4万円になる。「1万円くらいだったら出しやすい」という意見も出たが、「みんながこのくらい出そうというところまで意思統一できないと成功しない」ということで、200万としたのだ。

ところがある日、会議が始まると、みんな黙っている。

「どうしたの？」

岡元さんが声をかけるが、シーン。

「何があったの？」

重ねての問いかけに、「じつはね」と、一人が打ち明けた。

「みんなでよく考えたんだけど、これだけのお金をかけても、どれだけニーズがあるか。もし赤字になったら誰が責任を持つのか。もう一回、白紙に戻して考え直した方がいい、ということになったのよ」

「えっ！　何？　なにいってるのよ。ここまで話し合ってきたのに、何なのよ！やるしかないよ」

しかし、みんなはまた黙ってしまった。

岡元さんにとっては、まさに寝耳に水だった。

〝やっていくっきゃない〟と突っ走る岡元さんの前では本音を出せなかった人たちが、会議が終わってから「ほんとにだいじょうぶなの」と不安を口にすると、「赤字になったら…」「やっぱり無理なのでは…」という方向に傾いただけなのだったが、岡元さんは〝自分をはずしたところでそんな話し合いをしていたのか！〟と、ショックだった。労協は仕事おこしの協同組合だ、といっても、みんな初めての経験。だれしも躊躇する。しかし、リーダーも一緒に不安がっていたのでは何事も始まらない。

〝もうだめかもしれない〟という思いが頭をかすめたが、〝やるしかない！〟と意を決し、「赤字になったら、私が責任を持つ」とも言い切った。

ようやく、一人が口を開いた。

「もしこのまま仕事が切られて、みんながばらばらになって、はい、さようなら、となったら、もう一回仕事をおこしたい、という思いになったとしても、もう集まりっこないよね。せっかくここまで話し合いをしてきたんだから、やっぱり、もう一

回、やる方向で話し合おうよ」

北御牧村に行った仲間の一人で、大越さんだった。〝ああ、よかった！〟岡元さんは正直、そう思った。流れは決まった。〝やっぱりこのままじゃいけないよね、踏ん切らなきゃ〟と。

岡元さんには、うれしいこともあった。夫が豆腐への挑戦には両手を上げて賛成してくれたのだ。それも、言葉だけでなく、自家製豆腐を作る木箱とにがりと大豆を買ってきてくれたのだった。にがりも大島の海精にがりがいい、と調べて、取引先への連絡までしてくれた。

「その点ではすごい」

初めて夫を誉める言葉が出た。岡元さんはニコニコしていた。

つるつるピカピカと光る豆腐

吹っ切れると、どう成功させるか、という前向きの話がどんどん進んだ。

「私も50枚だったらチラシを配れるよ」

「1万円だったら出資はできるよ」。

知り合いの生協組合員にも協力をお願いすると、5万、10万と出資してもらえた。200万は、またたくまに集まった。

種大豆は北御牧の方から分けてもらい、種まきから自分たちでやることにした。

組合員の中西千恵子さんが「家の畑を」と申し出てくれた。JAで借りたトラクターで、中西さんのお父さんに耕してもらった。

大変だったのは草取りだ。ちょうど暑くなる初夏。生協現場が終わって4時過ぎから毎日60人がそろって3時間汗を流した。しかし、1週間かけてやりあげたと思うと、また草が生えている。

指導をお願いしたJAの人から除草剤をまくようにいわれたが、「私たちは無農薬でこの大豆を作りたいんです。それが自分たちの豆腐作りの目標なんです」と拒否した。

JAの人はあきれて、「好きにすればいいよ」といいつつ、「畦を作れば、どんどん大豆が茂る。影ができてきたら草も生えなくなる」と教えてくれ、畦を作る小型トラクターも貸してくれた。

素人だから200キロもとれればいい、といわれたが、収穫は450キロ。それ以後は、この大豆で、地元の農家に栽培してもらうことにした。もちろん低農薬で。

豆腐づくりの指導には、機材会社の人が10日間も泊まり込みで来てくれた。

にがりの打ち方は1人にしか教えてくれない。「野菜の仕事がなくなって、時間が空いてたから」という高山恵津子さんが担当したが、短期間に覚えなければならない。「お豆腐が固まらなくて、どうしようどうしよう」という夢をよくみた。岡元さんも同じ夢をみた。

〝おいしい〟と思えるのに、〝まだだめだ、捨てろ〟といわれたときは、もったいないからと、ボールに入れ、「試作品ですけど、食べてみてください」と、地域に宣伝しながら配った。

「〝これでいい〟といわれた豆腐は、クリーム状で、つるつるピカピカと光っていて、包丁を入れてもまた元に戻る感じで、味わったことのない甘さがあったんです」

95年6月、とうふ工房「ワーカーズコープ愛彩」がスタートした。

高齢者の自立支援広げ

高齢者への配食で実態知る

事業計画を広く描き、その第一歩をみんなで実現した。その自信があったから、次の事業展開はごく自然に進んだ。

とうふ工房は手狭になり移転。以前の場所は、高齢者への配食サービスもす

る「愛彩弁当」の店にした。オープンは97年2月。

配達すると、「よく来てくれた。まあまあまあ、お茶をのんでって。上がって上がって」と、いろんな話をもちかけられる。

「すみませんね。次の配達があるんです」

そういうと、がっかりされ、「そうかあ」と、門まで追いかけてくる。誰とも会わずに1日を過ごす高齢者がめずらしくないのだ。

「体の具合が悪いので、洗濯をしてもらえないか」というような話もよく聞いた。部屋の中が散らかり放題、という家もある。

会えば、いろいろと頼みごともしてくる高齢者だが、自分から弁当を注文してくることはまずない。大きな農家に人暮らしか老夫婦だけ。「どういうものを食べてるかわからない。1食でもきちっとしたものを届けてくれないか」と、子どもからの注文なのだ。高齢者はどんなに困っていても、がまんしてしまう。自分たちから発信しようとはしない。

「この人たち、倒れたり、何かあったらどうなるんだろうね」「もうちょっと関われる仕組みをつくりたい」「やるしかない」

こうして、ヘルパーの仕事に進むことになった。

殺到したヘルパー講座受講生

98年1月、最初のヘルパー講座（3級）を開いた。

労協全体では、「市民自身が地域福祉の担い手に」と呼びかけ、94～95年からヘルパー講座を開きはじめていたが、まだ介護保険は始まっておらず、「講師をどう集めたらいいのか、会場をどうしたらいいのか、何をどこからどうやったらいいのかが見えなかったし、受講生が集まらなかったらどうするのかとか考えて」踏ん切れなかったのだ。

「ん？　何をいってるんだ、集まらなかったら、できないだけだろうが」

永戸専務にまた、あっさりとかわされ、逃げられなくなる。

一旦決まったら、猪年の岡元さん、本領発揮だ。まず県に電話し、どうしたらいいかを聞いた。近くの地方庁舎を訪ねると、一般市民がヘルパー講座を主催することなどなかったので、「すごいですねえ」と感心。後日、「がんばって」の言葉を添えて、書類が送られてきた。

深谷市と社会福祉協議会では、「地域の高齢者を支える役割をもつヘルパーになるのだから、市民が受講しやすいように補助金を出してほしい、会場確保に協力してほしい、広報に掲載してほしい、講師になってほしい」と要請した。

広報での紹介と講師は引き受けてもらえたが、担当者は「2万5000円もの受講料を出して受ける人がいるんですかねえ」と首を傾げた。それは、実は、岡元さん自身の不安でもあった。

ところが、受付を開始すると申し込みが殺到。電話は一本しかないので話し中となる。市から「どうなっているのか」

ヘルパー養成講座では永戸専務の特別講座も

と問い合わせがきた。広報にのった関係で、市にも苦情が相次いだらしいのだ。申込者は、30人の定員に対し200人近くに達した。

この年、3級を2回、2級を1回開き、99年に入って2回目の2級講座を開いたときは、最初から、「みんなで事業所を立ち上げよう」と訴えた。

「協同組合は人に命令されたりするのではなくて、一人ひとりが意見を出し合ってつくりあげていくところ。働くことの中身、仕組みから自分たちで考え、話し合うから、責任をもつし、いいものになっていく。それが一番理想的な働き方。みんなの力を出し合えばできる。仕事を他に持っていてもいいから、ぜひ登録して」

これまでの経験があるだけに、実感を持って伝え、呼びかけることができた。

「すごいのよ、すごいのよ」

99年5月、「ヘルパーステーションだんらん」の立ち上げには、30人の受講生のうち20人が加わった。

介護保険が始まっていないこともあり、高齢者の介護だけでなく何でもやります、と打ち出し、みんなで1万3000枚のチラシを配ったが、ほとんど仕事はこなかった。

当然にも、〝どうしてくれるのよ、仕事がこないじゃないのよ〟という話になってきた。

しかし、岡元さんはもう揺るがなかった。

「絶対私たちを必要とする人たちが地域にはいるはず。社協のヘルパーさんだけでは、困ってる人たちの対応はできない。家事ができない人もいる。子育てで困ってる人もいる」と繰り返した。

そして、「協同組合なんだから、〝どうしてくれるのよ〟ではなくって〝どうすればいいのか〟考えよう」と提起し、「もっと地域の人に知らせなければいけない。じゃあ、どういうところをまわればいいのか」と投げかけた。

行政、民生委員、病院、訪問看護ステーション、薬局などにもっと顔を出そうということになった。

『病院で死ぬということ』上映の際につながりができていたこともあって、病院はずいぶんまわった。産婦人科では、産後のお手伝いができたらといって、チラシ、ポスターを置かせてもらった。

00年4月、介護保険スタートに当たっては、「来た仕事は一切断らない」ということを確認した。それには、利用者の多様なニーズに応えきれるだけの人数、「この時間ならできる」という人がたくさんいなければならない。「1週間に1回1時間だけならできる」という人も含めて、200人の修了生にあらためて就労契約を呼びかけることにした。

そこで、同窓会とあわせて、新井家光市長と羽田澄子監督との対談を企画、「深谷の福祉を考える『映画とトーク』の集い」も開いた。

介護の依頼はどんどん来た。資格を得たばかりのみんなは不安だらけだ。

ヘルパー講座は修了式を迎えるたびに手料理でお祝い

岡元さんは「大丈夫、大丈夫。数をこなせば慣れてくる」の一点張りで励ました。

「でも、大変なのよ、大変なのよ」という人がいれば、ああ、いつも自分が本部にいっていた言葉だな、と受け止めながら、「とりあえず私が行くから」といって、こうすればいい、というものをつかみ、次からは入ってもらうようにした。

実際、やりはじめると、利用者から喜ばれる言葉がすぐ返ってきた。

だんらんでのヘルパー講座では、毎回、永戸専務らの特別講義が組まれた。岡元さんも、労協の説明をし、短時間就労の人にも、「働き方は協同組合なので、出資金が必要だ」と最初に訴え、組合員になってもらい、毎月の定例会議やケース検討会を通じて、労協の働き方をしっかり受け止めてもらうようにしている。

だから、新しく入ったヘルパーは、「先輩たちが苦労してやってきたことがつながって今があるのね」と、いってくれる。

ヘルパーは自宅と利用者宅との直行直帰ではなく、できるだけ事務所に立ち寄ってもらう。

「いいことがあったらみんなに伝えてね。つらいときは家に持ち帰らないで、必ず事務所に来て、はきだしてね。じゃあどうすればいいかってのはみんなで考えればいいことだから」といって。

そんなふうにしているから、毎月夜7時からなのだが、定例会（土曜夜か日曜昼かどちらか）にはほぼ全員が集まる。いいことも悪いことも、そこで話し合えるから、いいケアにつながっていく。随時開くケース検討会も大事にしている。

岡元さんが本部のメンバー相手に口にする言葉は、「すごいのよ、すごいのよ」に変わった。

痴呆症状があり、24時間ベッドにしばられ、お腹に穴を開けて点滴で栄養をとっていた方が、退院1週間後に「普通の人みたい」になってしまった例、医者も処置をあきらめた〝死が目前〟の人が数ヵ月で普通の生活に戻ったという例などが、ヘルパーの関わりのなかで生まれてきたのだ。

大家さんたちも共感し協力、参加

1年後、01年7月には「デイサービスだんらん」を立ち上げた。

地域の人たちが歩いてこれる場に、あったかい家庭的なデイサービスをと、撤退したセブンイレブンのお店を借りた。人通りが多く、広い駐車場もある。1階をデイサービスと配食、2階を訪問介護のステーションにした。ここのデイサービスでは、利用者が利用者を呼んでくる。おしゃべりをし、仲間ができ、利用者が主体になり、得意なことを披露して、〝先生〟になったりもする。だから、どんどん元気になる。

こうした施設づくりでは、大家さんの協力もある。

「だんらん」の家賃は最初、45万円といわれた。「地域のお年よりが住み慣れたところから歩いてこれるような場所でデイサービスを始めたい」という話をすると、不動産屋さんも「わかりました。では、一緒に大家さんのところへ」となり、大家さんに話すと、30万で、ということに。なんとか採算がとれるので借りた。

03年5月に妻沼町でデイサービス「ほほえみ」を立ち上げたときも、所長になる吉川千恵子さんらが「ほんとにお金がないんですけど、だめですか」というと、大家さんが「それじゃ、いくらなら出せるのか、みんなで相談しておいで」といってくれ、こちらが示した額でOKとなった。改装も大家さんの費用でやってくれた。

アメリカのAARP（全米退職者協会）からもお客さん

この大家さんは開所式で「利益が目的ではなく、みんなでお金を出し合ってやっているというし、私も近所の人たちにお世話になってるから、これは応援しなけりゃあ、という気になったんです」とあいさつした。

麦畑の中の資材置場だった建物に「とうふ工房」を移転したときも、4、5人の女性たちが思いを伝えると、家賃は事業が軌道に乗るまで待つので、1年10ヵ月後からの支払いでいい、改装費はいらない、といってくれた。

ヘルパーたちが〝自分たちの事業〟をする、というのでは市民は協力してくれない。この事業が何のためにあるのか、市民との接点でどういう意味をもっているのか、こういう事業が広がったらこの地域はどう変わるのか、そこを誠心誠意語り、やる気が通じたとき、広い市民の共感とさまざまな形での参加が実現し、資金も調達できていった。

会員制の生きがい活動の場もある「だんらん上柴」も昨年暮れにオープンした。ヘルパー講座修了生はもうすこしで1000人に達する。

「やっぱし、思っててくれてたんだ」

かつて、「余った時間」だけ働いていた女性たち。今では、朝早くから夜遅くまで動き回っている。夫との関係はどうなったか。

「生協の仕事をしていたときも、自分たちでシフトを組み立てるようになってきたら、みんな、ご主人に対して、自分はきちっと働いてるといえるようになった、といっていました」

岡元さん自身も「前は、〝まったくう！〟と腹をたてながら、いわれるままにしてたけど、だんだん私の勢力が強くなって、〝冷蔵庫あければ材料はあるんだから、自分でつくればいいじゃないか〟といえるようになったし、今はもう何もいわれない」

偏頭痛がして、「とにかく納豆ごはんで食べてくれ」といって、そのまま布団に入ったことがあった。何か気持ちがいいと思ったら、夫がこめかみをもんでくれていた。

「娘から『お父さん、すごい心配してるんだよ』って聞いて、うれしくなって。ああ、やっぱし、思っててくれてたんだって」

今の苦労は、自分たちが年をとったとき、本当に安心して暮らせる地域にしていくためのものだとも思う。

「地域の必要性をもとに事業計画を立て、いろんな人たちに訴えていけば、自分たちで拠点をつくれる。雇用を待っているだけではなくて、自ら地域で拠点を作って頑張ることができる。こういう地域福祉事業所を一つといわずに、またもう一つと頑張っていきたいなと思っています。当面、中学校区に1カ所の地域福祉事業所が目標です。清掃の仕事、障害者支援、子育て支援もぜひやりたいと思っています」

特別講座での、岡元さんの話はいよいよ波に乗ってきた。

市民の協同の力で 地域ひらく

地域福祉事業所

深谷だんらんグループ

FUKAYA DANRAN

発行日 2005年3月5日 第一刷発行
定価580円（本体552円+税）

発行人――永戸祐三
編集人――松沢常夫・飯島信吾
編集協力―シーアンドシー出版
デザイン――六月舎

発行
日本労働者協同組合連合会センター事業団
〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-33-10 東京労働会館
TEL.03-5978-2180 FAX.03-5978-2184